

三寶繪詞の研究

——特に天台宗の佛教儀禮を中心として——

伊藤眞徹

一、はじめに

『三寶繪詞』卷下に收録せられている諸寺の法會は、作者源爲憲が「此卷には正月よりはしめ。十二月まで。月にしける所のわざをしるせるなり」と言う如く、著名な佛事を月別に記録したものであるが、もちろんこれが總てを網羅したと言うものではない。ただしこれ等の法會佛事が、公卿の参加又は關心を多く引くものであつたことは否定せられぬ。

「『三寶繪』に擧げる佛事とは

正月

修正月。御齋會。比叡懺法。温室。布薩。

二月

修二月。西院阿難悔過。山階寺涅槃會。石塔。

三月

志賀傳法會。藥師寺最勝會。高雄法花會。法花寺花嚴會。比叡坂本勸學會。藥師寺の萬燈會。

四月

比叡舍利會。大安寺大般若會。灌佛。比叡受戒。

五月

長谷菩薩戒。施米。

六月

東大寺千花會

七月

文殊會。孟蘭盆。

八月

比叡不斷念佛。八幡放生會。

九月

比叡灌頂。

十月

山階寺維摩會。

十一月

熊野八講會。比叡霜月會。

十二月

御佛名

である。これ等はすべて、源爲憲の主觀によつて、多くの中から選定せられたものであるが、大きく別けて、宮中その他院及び公家、一般諸寺院、特定の大寺において行われたものに大別することができる。

宮中、院家の行事として行われたものは御齋會、灌佛、施米、文殊會、佛名等であり、一般の諸寺において行われたものは修正月、温室、布薩、修二月、盂蘭盆會である。特定寺院の特定法會を挙げたのは、北嶺比叡の四季懺法、坂本勸學會、舍利會、受戒、不斷念佛、灌頂、霜月會。藥師寺の最勝會、萬燈會。興福寺の涅槃會、維摩會。法華寺の華嚴會。大安寺の大般若會。長谷寺の菩薩戒、東大寺の千花會。高雄の法華會。西院の阿難悔過。志賀傳法會。八幡放生會である。その他室内を舞臺にせず、川原に出て野外で行われる行事を石塔という。

これ等三十一の法會が月を追うて、「是等のはしめおほりのありさまをしるせるなり」と、その撰述の基本が示されている。しかし『三寶繪詞』に採用せられた法會が多く、公卿の公的政治的生活と密着していたことは、『榮花物語』「うたがひ」卷には、「正月より十二月まで、年のうちのことどもに、一事はづれさせ給ふ事なし」と述べ、その年間恒例參詣の佛事を擧げている。しかし兩者を比較すると、『榮花物語』は『三寶繪詞』から正月の御齋會、比叡の四季の懺法、二月山階寺の涅槃會、三月志賀の彌勒會、四月比叡の舍利會、五月長谷寺の菩薩戒等を用いている。六月の東大寺千花會は『榮花物語』では「六月會に山に登らせ給ひては、傳教大師の御忌日を勤め行はせ給ふ」とあつて、六月會と差換えられている。七月奈良の文殊會、八月山の念佛いわゆる不斷念佛、九月比叡山の灌頂は東寺の灌頂と變えられ、十月山階寺の維摩會、十一月山の霜月會、十二月御佛名が擧げられている。

この道長の佛事善根に關する記述は、『三寶繪詞』に據つて言うまでもないが、單なる『三寶繪』の轉寫でなく、普遍化し、年中佛事化していた法會に積極的に参加し、その中に貴族的襟度すら見られる。即ち御齋會の場合「講師仕うまつるとて八省にある講師をとぶらひあへり」とか、四季の懺法における「佛供、御燈までの

事をせさせ給ふ」とか、その一例である。また九月の比叡の灌頂を東寺の灌頂と書改めた深意については知る由もないが、東寺の灌頂については、「道俗加持の香水をもちて、法身の頂に注がるとおほしめす」とあり、比叡の灌頂の條には、「四人門前にしているべき人の頂に水を注ぐ、道俗加持といふ」とあつて、法會の主軸をなす儀式は、同様であることが知られる。更らに霜月會は「はしめおほりのありさまをしるせるなり」の態度を崩さなかつたのは『三寶繪詞』であつて、『榮花物語』は恰も道長がその法會の中心人物的立場にあつて登場している。即ち「山の霜月會の内論義にあはせ給ひては、法師ばらの論義の劣り勝りの程を定めさせ給ひて、勝るには物をかげ、御衣をぬがせ給、劣るには、今度参りてせんとす。よく學問すべしといひ勵まさせ給ふ程も、佛の御方便に似させ給へり。」とあることによつて伺える。

『三寶繪詞』にあつて、『榮花物語』に故意に脱したと思われる佛教年中行事は勸學會である。しかるにこれより前段に學問を勸奨するなか、

月の夜、花の朝には、物の音を吹き合せ調べ、殿ばら僧だち、經の中の心を歌に詠み、文に作らせ給ふ。あるは「百千萬劫の菩提の種、八十三年の功德の林」又、「願はくは今生世俗文學の業、狂言綺語の誤をもて、かへして當來世に讚佛乘の因、轉法輪の縁とせん」など、誦し給ふも尊く面白し。（「日本古典文學大系」四五〇）とあるので、再出を避けたものではないかと思われる。更らに後述する如く寛仁三年（一〇一九）道長出家の當時は既に中絶していたので、轉記することを憚つたのであろう。

『今昔物語』卷一二の第三話から第十話までは諸寺の法會の縁起譚であつて、即ち山階寺の維摩會、大極殿の御齋會、藥師寺最勝會、山階寺涅槃會、東大寺華嚴會、藥師寺の萬燈會、比叡山の舍利會の七項であり、石清水放生會以外の典據は『三寶繪詞』に求められるが、必ずしも法會の内容にまで言及せず、文學的興趣に富む部分のみに

限定せられていることは、その撰述目的の相違に由るものである。この外、卷一一の「傳教大師始建比叡山語」「慈覺大師始建楞嚴院語」の二項が、素材を『三寶繪詞』卷下「比叡懺法」と「比叡舍利會」に據っているが、素材選擇の立場は前記と同様である。これ等を加えても南都の諸寺に比重がかけられていることは明らかであるが、しかし維摩會、御齋會、最勝會は南京三會といわれる盛儀である。山階寺の涅槃會について、「此會、儀式・作法・舞樂、興、微妙、他所不似、心及所非。」（日本古典文學大系一三八頁）とあり、「東大寺花嚴會」については、「其鏑荷、杖、于今御堂、東方庭有、其長増事尤、亦、不榮常枯相有」（同上二四〇）とある。「藥師寺萬燈會」は、創始者惠達の墓にその夜光り有るとの奇譚を付記し、「心有人必可結縁會也」と述べられて、その中に俗信俗説をも含めて、廣く世俗に浸透していたことが知られる。

二、比叡懺法

源爲憲の『三寶繪詞』下卷撰述の意圖は、末世の僧と言えども「すべて世のともし火とつたへ。國の實となづけたり。年の中にはたうときわぎを行ひゆくすえのよきみちをしふること。みな聲聞の徳にあらぬはなし。我今たな心をあはせて。僧のたうときをあらはす」（下巻序）とある。即ち僧はすべてのよきみちをしふる年間のたうときわぎを行う故に、たうときことを顯揚せんとするのである。その行う儀禮について叡山佛法について、特にその内容につき検討を試みれば、先ず順序に従えば、正月に「比叡懺法」が擧げられる。

内容は比叡山の開祖傳教大師の傳が述べられているが、その典據は仁忠撰の『叡山大師傳』に求められる。即ち『三寶繪詞』と傳文を比較すれば明瞭である。爲憲が典據とした點を對比すれば

大師俗の姓はみつの氏。近江國志賀郡の人也。

—— 俗姓三津首。滋賀人也。

いとたうとくして心さかし

七歳にしてさとりあきらけし。あまたのことをかねしれり。

十二歳にして頭をそる。

はじめてひえの山に入りていほりを結てつとめ行ふ。

香呂の灰の中に佛の舍利をえたり。

いれむ器をねかひ給に。灰の中より金の花の器をえたり。

延暦廿三年にもろこしにわたりて。天台山にのぼりぬ。

又道遂和尚にあひて天台の法文をうけ習へり。

適生孩子。知語辨色。憶持諸事。

年七歳。學超同列。志宗佛道。村邑小學謂爲師範。

年十二投近江大國師傳燈法師位行表所。出家修學。

於叡岳左脚神宮禪院。修行懺悔。未歷數日。

忽自於香爐中。出顯佛舍利一粒。大如麻子。

又經少時。於灰中^(得脫力)金花器一合子。大如菊花。

卽盛舍利。宛如舊器。

廿三年秋七月。上第二船。直指西方。……如扇順風。未久著岸。名爲明州鄞縣。此台州近境也。……大唐貞元廿年九月上旬。……但和尚別向天台山。

同月下旬。到台州天台山國清寺。……時台州刺史陸淳。延天台山修禪寺座主僧道邃。於台州龍興寺。闡揚天台法門摩訶止觀等。卽便刺史見求法志。隨喜云。弘道在人。人能持道。我道興隆。今當時矣。……邃和上親開心要。咸決義理。如瀉水瓶。似得寶珠矣。

佛龍寺の行滿座主のいはく。昔きゝき。智者大師の給はく。我死てのち二百余歳に。はじめて東の國にしてわが法をひろめむとの給へり。ひしりのみことたかはすして。今この人にあへり。はやくもとの國に歸て道を広めよといひて。おほくの法文をさつてたり。

延暦廿四年にかへりきたり。

八幡の御前にして。法華經を講ずるに。ほくらの中より紫のけさをほどこして。法をきゝつる恩をむくひたり。

春日社にて法華經を講ずるに。峯の上より紫の雲たちて經をとく庭をおほへり。神のほどこせる衣いまに山におさめたり。

又同時有付法佛龍寺行滿座主。見求法深心。自相語言。昔聞。智者大師告諸弟子等。吾滅後二百餘歲。始於東國興隆我法。聖語不朽。今遇此人矣。我所披閱法門。捨與日本闍梨。將去海東。當紹傳燈。凡法華疏。涅槃疏。釋籤。止觀。并記等八十二卷。

五月中旬。上第一船。蒙三寶護念。神祇冥護。海中無恙。著長門國。即便上京。所將來天台法門并眞言法門道具等。奉進內裏。

又奉爲八幡大神。於神宮寺。自講法華經。乃開講竟。大神託宣。我不聞法音。久歷歲年。幸值遇和上。得聞正教。兼爲我所修行種種功德。至誠隨喜。何足謝德矣。苟有我所持法衣。卽託宣主自開齋殿。手捧紫袈裟一紫衣一。奉上和上。大悲力故。幸垂納受。……此大神所施法衣。今在山院也。

又於賀春神宮寺。和上自講法華經。謝報神恩。是時豐前國田河郡司并村邑刀禰等。錄瑞靈狀。奉上大師。適取固封。告弟子義眞言。自非滅

後。不得披封。奉教固緘。滅後披見。其文云。
以今月十八日未時。紫雲光耀。自鹿春峰起。
亘蒼空。靄覆講法之庭。忽見瑞相。舉衆歎異。
郡解如別。

像法の時をすくひ給へとて。手づから中堂の薬師如來の像をつくり。妙法のみちをひらかんとちかひて。ねむころに天台の智者大師の跡をひろめ給へり。

弘仁三年七月に。法花堂を造て。大乘をよましむること。よるひるたゝす。

谷の中によるくは法花經を誦することあり。求れども人なし。こゑを尋て至りつゝみれば。人の頭のほねのふるくかれたるあり。即これを堂のかたはらに埋て。人をしてふまさらしむ。

ひろく願の文をあらはして。時ことにそへよましむ。ちかひて炬の光をかゝけていまたきへす。

又弘仁三年七月上旬。造法華三昧堂。簡淨行衆五六以上。晝夜不絶。奉讀法華大乘經典。然弘誓之力。盡於後際。善根之功。覆於有情。可不美歟。

種種願文。別在卷軸。每座添讀。良爲發心境矣。

以上が『三寶繪詞』の傳教大師最澄の傳を、『叡山大師傳』と對照したものである。『三寶繪詞』の傳文のなか、「像法の時をすくひ給へとて。手づから中堂の薬師如來の像をつくり。妙法のみちをひらかんとちかひて。ねむころに天台の智者大師の跡をひろめ給へり」と、「谷の中によるくは法花經を誦することあり。求れども人なし。

こゑを尋て至りつゝみれば。人の頭のほねのふるくかれたるあり。即これを堂のかたはらに埋て。人をしてふまさらしむ」の二項は『叡山大師傳』に存せぬ事柄である。前者については圓珍の『傳教大師「行業記」』には『叡山大師傳』の意を繼ぎ、

延暦四年。深觀ニ无常。又恨ニ法澆。遊心大來。遁身山林。其年七月中旬。登ニ睿峯。結ニ艸爲レ宿奉ニ爲四恩。毎
日轉ニ讀法華金光明般若等經。一心精勤。(續群類八下四八一)

とあり、『傳教大師行狀』には

延暦四年^{乙丑}七月中旬。初登ニ睿岳。結ニ菴爲レ宿。^{生年}十九。同七年初結ニ構堂。奉ニ安置藥師佛像。號ニ比叡山寺。

後称ニ一乘止觀院。(同上・四八六)

とある。これによれば『大師傳』は藥師佛像造立には觸れていないが、長久年中(一〇四〇—一〇四四)成立の『法華驗記』上の「誓レ度ニ像法惡衆生」。手自刻ニ藥師如來ニ安置根本中堂」は、むしろ『行狀』及び『三寶繪詞』に影響されたものである。『山門堂舍記』には

延暦七年戊辰傳教大師建立者。伐ニ虛空藏尾自倒之木。以ニ本切ニ自手彫ニ刻藥師佛像一軀安置之。大師發ニ誓願而祈ニ利生。件像揺レ頭而諾ニ濟衆一如ニ生佛。詎謂ニ木像ニ矣(群類二四、四六八)

とあり、「立高各五尺五寸。竝身押金。衣文綵色」と佛像について註記せられている。また『今昔物語集』卷第一

一「傳教大師、始^{メテ}建^{タル}比叡山語」第二六に

今昔、傳教大師、比叡山建立^{シテ}根本中堂自藥師像造安置奉。天台宗立智者大師跡弘事、思^フ如ク也
(日本古典文學大系三、一〇八)

とあることによつて、最澄自作の等身像であることは明らかに傳えられている。

後者については『叡岳要記』上に

大師別願〔欲〕建此堂。弘仁之初擇〔於〕其地未〔得〕勝形。每夜聞有誦法華經安樂行品音。〔衍敷〕大師豎耳聽之。

此聲〔出〕於止觀院西塚林中。驚恠以尋之。有聲無人。如茲數日矣。大師以爲一宗法音自然依不退轉輪之場者。去此何求乎。即平治此地營造法華堂。地土之中有二髑髏。白骨赤舌。大師異之。瘞于堂傍。〔群類〕二四・五二四

とあり、『山門堂舎記』は『三寶繪詞』に近く

弘仁元年春。根本中堂始三部長講之夜。谷頂有誦法花安樂行品之音。二兩夜尋音呼求。雖聞誦音不見人跡。以燈求覓有朽頭骨。手探捧之向誦經。仍埋不令踏。即於其所建立法花堂也〔同上・四七〇〕とある。髑髏の法華經讀誦の説話は『日本靈異記』卷下の第一話「憶持法花經者舌著髑髏中不朽縁」第一が初見であつて、『今昔物語集』の卷第一二「僧死後、舌殘在山誦法花語」第三一は『靈異記』によつて構成せられている。『日本靈異記』の内容は、紀伊國牟婁郡熊野村永興禪師は、法華大乘を誦持することを業とする、一年餘同居の或る僧を、伊勢に見送り別れた。一僧あつて熊野川の上の山に入り船を作る。この時法華經を誦して止まず。半年後再び山に入るに、なお經を誦する聲あり。永興禪師も通報により實地見聞することを得て、所持品により、さきの僧であることを確認し、悲涙と共に離れて還る。三年後

山人告云、讀經之音、如常不止。永興復往、將取其骨、見髑髏者、至于三年、其舌不腐、宛然生有。諒知、大乘不思議力、誦經積功驗德也。〔日本古典全書三五八〕

とあり、『今昔物語集』はこの部分で終結せられているが、『日本靈異記』は

又吉野金峯、有二禪師、往峯行道。禪師聞、往前有音、讀於法花經金剛般若經。聞之留立、排開草中、

而見之者、有^二鬻體^一、歷^レ久日曝、其舌不^レ爛、而生著有。禪師取^二收淨處^一、語^二鬻體^一言、以^二因縁^一故、汝值^二於我^一。便以^二草葺^一覆於其上^一、共住讀^レ經、六時行道。禪師隨^レ讀^二法花^一、鬻體共讀故、見^二彼舌^一、舌振動矣（同上・三五八）

の說話一が添加せられている。

なお兩者の比較によつて知られる他の一點は、延暦二四年（八〇五）歸朝の後、海路安全所願成就の奉謝のため、宇佐宮と香春社參詣の事項である。宇佐八幡宮拜禮については異論のないところであるが、『三寶繪詞』は「春日社において……」とあり、尊經閣本は「於春日社講法花經自峯上紫雲立覆說法之場」とあるので、誤字でないことは明瞭であつて、『法華驗記』もこの立場に立っている。しかし『續日本後紀』卷六、承和四年（八三七）一二月の條に太宰府言。管豐前國田河郡香春岑神。辛國息長大姫。大目命。忍骨命。豐比咩命。惣是三社。元來是石山。而土木惣無。至^二延暦年中^一。遣唐請益僧最澄。躬到^二此山^一祈云。願縁^二神力^一。平得^二渡海^一。即於^二山下^一。爲^レ神造^レ寺讀經。爾來草木蒼鬱。神驗如^レ在。每^レ有^二水旱疾疫之災^一。郡司百姓就^レ之祈禱。必蒙^二感應^一。年登人壽。異^二於他郡^一。望預^二官社^一。以表^二崇祠^一。許^レ之。（國史大系三・七〇）

とあるので、最澄は渡唐以前にこの社に詣で、渡唐の海路平安を祈つたので、所願成就の奉酬に、この地に赴いたことは自然であり、またその神宮寺造營により、神域擴大宏壯となり、官社に列せられるに至つた記事からして、最澄は太宰府と共に、豐前の香春社に詣でたことは事實と解せられる。

法華三昧の始行については、すでに觸れたところであるが、『叡岳要記』上には

嘉祥元年春慈覺大師傳^{〔符敷〕}平行半坐三昧行法華^{〔行敷〕}。每^二四季終^一期^二三七日^一建^二普賢道場^一懺^二悔六根罪障^一。永期^二未來

際^二修^二法華三昧^一。爾來數百歲。酌^二遺流^一即不^レ絕矣。（群類二四・五二四頁）

とあり、最澄・圓仁共に入唐してこの行法を傳えたが、その兩者の相傳の關係については、續いて「傳教大師延暦廿三年入唐求法之日。隨天台第七祖師行滿和尚傳教大繩」。〔後數〕彼慈覺大師拾其精要流布叡岳。法華三昧之軌躅。邈矣悠也」(同上)とある。慈覺の相傳については『慈覺大師傳』に

嘉祥元年春。奉詔入京。即登本山。禮拜師跡。於是僧徒成雲。言泗如雨。隨喜讚歎。禮拜諸尊曼荼羅。親披閱

眞言儀軌。大師於是始改傳法華懺法。先師昔傳其大綱。大師今弘此精要。〔續群八下、六九二〕

ある。又『日本往生極樂記』にも、「彌陀念佛。法華懺法。灌頂。舍利會等。大師所傳也」(續淨六・五頁)とあつて、その定式化の功を讃えた。しかるになお殘る問題は、この行法の時季と構成人員であるが、その構成人員については前出の如くであり、『傳教大師行狀』には「同春。〔弘仁元年〕於一乘止觀院。起修三部長講。夜宿堂中。谷頭有誦法花經之音。一兩夜尋音呼求。雖聞誦音。不見人體。以燈求覓。有朽頭骨、手機捧之。尙誦經也。恒不令踏。弘仁三年七月。建法花堂於此地。始三昧之行法。修四季之懺法」(續群八下・四八七)とある。しかるに『叡岳要記』(續群八下・四八六)は濫觴は最澄にありとするが、さらに前引の如く「嘉祥元年春慈覺大師傳半行半坐三昧行法華。每四季終二期三七日建普賢道場懺悔六根罪障。永期未來際修法華三昧」とあるので、圓仁によつて大成せられたことが知られ、いま四季の終とあるのは、『三寶繪詞』に言う如く四季の初めが妥當と考えられる。

法華三昧について、『普賢菩薩行法經』には

誦大乘經者。修大乘者。發大乘意者。樂見普賢菩薩色身者。樂見多寶佛塔者。樂見釋迦牟尼佛及分身諸佛者。樂得六根清淨者。當學是觀。此觀功德除諸障礙。見上妙色。不入三昧。但誦持故。

專心修習。心心相次。不離大乘。一日至三七日。得見普賢。有重障者。七七日盡然後得見。復有重

者一生得_レ見。復有_二重者_一三生得_レ見。復有_二重者_一三生得_レ見。如是種種業報不_レ同。是故異說。(正藏九、三八九)とあり、天台智顗は慧思の門に入つて、三昧を行じたことについて、『續高僧傳』に

又詣_二光州大蘇山慧思禪師_一。受_二業心觀_一。(中略)思每歎曰。昔在_二靈山_一同聽_二法華_一。宿緣所_レ迫今復來矣。即示_二普賢道場_一。爲說_二四安樂行_一。顗乃於_二此山_一行_二法華三昧_一。始經_二三夕_一。誦至_二藥王品_一。心緣_二苦行_一。至_二是真精進句_一。解悟便發。見_二共思師_一處_二靈鷲山七寶淨土_一聽_二佛說法_一。故思云。非_レ爾弗_レ感。非_レ我莫_レ識。此法華三昧前方便也。(正藏五〇・五六四)

とある。又この三昧を修する方法について、『摩訶止觀』卷二上には、「約_二法華_一亦明_二方法勸修_一」と述べ、

身開爲_レ十。一嚴_二淨道場_一。二淨身。三三業供養。四請佛。五禮佛。六六根懺悔。七遶旋。八誦經。九坐禪。十證相。別有_二一卷名_二法華三昧_一。是天台師所_レ著流_二轉於世_一。行者宗_レ之(正藏四六・一四)

とある。即ち章安灌頂は本書を撰述するに當り、その詳細は『法華三昧』に譲つたものである。『法華三昧懺儀』『法華三昧行法』、『法華三昧儀』又は『法華經三昧儀』と稱せられる一巻の書の題下には、「法華三昧行事運想補助儀禮法華經儀式」とあり、撰號の所に「隋瓦官寺沙門釋智顗輒采法華普賢觀經及諸大乘經意撰此法門流行後代」とある。章安のさすところが、本書に匹敵することは、すでに遵式は本書の序に

法華三昧儀者。天台大師瓦官親筆。蓋止觀第三三昧所指別行。即其文也(同上・九四九)と述べている。

その内容は(一)明三七日行法華懺法勸修第一、(二)明三七日行法前方便第二、(三)明正入道場三七日修行一心精進方法第三、(四)明初入道場正修行方法第四、(五)略明修證相第五に分れる。第四の正修方法は更に(1)嚴淨道場、(2)行者淨心、(3)行者修三業供養法、(4)請三寶方法、(5)讚歎三寶方法、(6)禮佛方法、(7)懺悔六根及勸請隨喜廻向發願方法、(8)行道

法、(9)重明誦經方法、(10)坐禪實相正觀方法に分れて、具體的に行法の展開が示されている。さらに湛然は『法華三昧行事運想補助儀』一卷（正藏四六・九五五）を撰し、「事儀運想多不周旋」ざるため、正確を期せんとし、正修方法の十科について、要義を述べるところがあつた。

『法華三昧懺儀』の第一は「明三七日行法華懺法勤修」であつて、それによれば

如來滅後。後五百歲濁惡世中。比丘比丘尼優婆塞優婆夷。誦大乘經者。欲修大乘行者。發大乘意者。欲見普賢菩薩色身者。欲見釋迦牟尼佛多寶佛塔分身諸佛及十方佛者。欲得六根清淨入佛境界通達閑者。欲得聞十方諸佛所說。一念之中悉能受持通達不忘。解釋演說無障礙者。欲得與文殊師利普賢等諸大菩薩共爲等侶者。……欲得破四魔。淨一切煩惱。滅一切障道罪。現身入菩薩正位。具一切諸佛自在功德者。先當於空閑處。三七日一心精進入法華三昧。若有現身犯五逆四重失比丘法。欲得清淨還具沙門律儀。得如上所說種種勝妙功德者。亦當於三七日中。一心精進修法華三昧。（正藏四六・九四九）

とある。本文には前出の普賢經の後半を出して行法の實踐を勧め、更らに『摩訶止觀』二上には懺悔を勧修して諸佛得道皆由此法。是佛父母世間無上大寶。若能修行得至分寶。但能讀誦得中分寶。華香供養得下分寶。佛與文殊一說二分寶所不能盡。況中上耶。若從地積寶至梵天以奉於佛。不如施持經者一食充驅。如經廣說云云。（正藏四六・一三）

の文を約要して結びとしている。

最澄は『台州錄』に「妙法蓮華經懺法一卷或名三昧行法 智者大師出一十八紙」、「妙法蓮華經三昧補助儀一卷荊溪和上撰三紙」（正藏五五・一〇五五）とあり、最澄の將來して廣く行われていたことは明らかである。

『慈覺大師傳』には「貞觀二年。以安樂行品傳法華堂」とあり、『往生極樂記』にも將來を記し、『天台霞標』

二編卷之二に『阿婆縛鈔』を引いて、「懺法者。南獄大師始_レ之。慈覺大師傳_レ之」とある。しかるにその將來目錄にその名を列ねぬことは、既に最澄によつて傳えられたところを、圓仁によつて特に重く取擧げた點のみを注目したと考えられる。

現今天台宗で行う法華懺法は、總禮伽陀、三寶禮、供養文、開白、咒願、敬禮段、六根段、四悔、十方念佛、經段、十方念佛、後唄、三禮、七佛通誠偈、六時偈、(神分・靈分・祈願)、九條錫杖、廻向伽陀の次第による唱文を主として修し、毎朝の勤行には「六根を法花に懺悔」するが、その時は開白と咒願を省略している。

三、比叡坂下勸學會

勸學會の起源は『三寶繪詞』には「村上上の御代、康保の初の年」とあり、『濫觴抄』下に「村上十九年甲子_四。應和三月十五日。北堂學生於_三西坂本_一始_二修之_一。次法花經一句爲_レ題作_三詩歌_一。序者慶保胤。其詞曰。處無_三定處_一。新林月林之一兩寺。期有_三定期_一。三月九月之十五日云々(群類二六・三三八)とある。尊經閣本は「村上御世康保元年」とあつて、觀智院本の文学的表現法とは異り、年次を明瞭に示し、かの天延二年八月十日の「勸學會所贈日州刺史橘倚平牒」には「抑此會草創以降十一年矣。期有_三常期_一。三月九月十五日。處無_三定處_一。親林月林一兩寺」。(國史大系二九下三〇五)とあり、また天延三年九月一〇日の「勸學會所欲建立堂舍狀」の文には「起_レ會以降十一箇年。縑素歸_レ心。内外勸_レ學」(同上 三三〇)とある。即ち天延二年(九七四)より逆算すれば、康保元年(九六四)は十一年目に當り、天延三年は既に十一年を經過した年に相當することが知られる。『濫觴抄』が村上十九年甲子とすることは、朱雀天皇の讓位により、即位せられたのは天慶九年(九四六)であり、この年より算えて十九年は、康保元年甲子(九六四)であつて、應和四年七月改元せられて康和となるので、三月十五日に始修せられたのであれば、むしろ

正しい記述法によるものである。よつて本書の成立した永觀二年（九八四）よりは、僅かに二十年を経過するのみであつて、勸學會の成立とその後の経緯については、源爲憲（一〇一七）の記憶に新しいところを書留めたものである。よつて本條については、彼自らの聞見したところを中心に、記録したものである。

この會の開催期日については、前出の引文によつて明らかであるが、その構成人員と趣旨については、「勸學會於禪林寺二賦三聚レ沙爲佛塔二詩序」には

台山禪侶二十口。翰林書生二十人。共作佛事。曰勸學會焉。結縁植因。盛哉大哉。方今令下一切衆生。入諸佛知見。莫先於法華經。故起心合掌。講其句偈。滅無量罪障。生極樂世界。莫勝於彌陀佛。故開口揚聲。唱其名號。凡知此會者。謂爲見佛聞法之張本。輕此會者。恐爲風月詩酒之樂遊。（國史大系二九下、二三九）

とある。これ『三寶繪詞』の本文に「經を講じ佛を念ずること其勤とせむ。この世後の世にながき友として。法の道。文の道をたがひにあひすゝめならはむと云て。始行へる事を勸學會と名づくるなり」と述べている内容を、一層より具體的に、且つ明瞭に示すものである。

高階積善の「勸學會於法興院二賦三世尊大恩二詩序」には「暮春暮秋十五日。緇衣白衣四十人。講法華二弄文藻。名爲勸學會」とある。この會の進行過程については、本文には「十四日の夕に。僧は山よりおりて。ふもとにあつまり。俗は月に乘て寺にゆく。道の間に聲を同くして。居易のつくれる百千萬劫の菩提の種。八十三年の功德の林といふ偈を誦してあゆくに。やうやく寺にきめるほどに。僧又聲を同くして。法華經の中の。志求佛道者。無量千萬億。咸以恭敬心。皆來至佛所と云偈を誦して。まちむかふ。」とある。即ち勸學會は十四日夕刻。台山の禪侶と大學北堂の學生の相會する適地が、坂本に求められたのである。「十五日の朝には。法華經を講じ夕には彌陀を念じて。

そのうちには曉にいたるまで。佛をほめ法をほめたてまつりて。その詩は寺にをく。」ことによつて、行事は終了に近付くのである。讚佛讚法の作詩を外面的に把える者は、保胤の懸念の如く「恐爲風月詩酒之樂遊」したことであらう。

作詩集を寺に安置することは、白居易の自作の詩を香山寺に収めた先例に准じ、北堂の學生は居易の詩を誦し、僧は法華經、又は龍樹の十二禮偈を誦して、夜を明かすのである。要するに講經・念佛・作詩・朗詠・誦偈を主軸とする講會であることが知られ、殊に「娑婆世界はこゑ佛事をなしければ。僧の妙なる偈頌をとなへ。俗のたうとき詩句を誦するをきくに。心おのづからうこきて。なみだ袖をうるほす」とある點が注目せられる。

北堂の學生が寺に至る道中、同じく吟詠したと言う白居易の詩は、『白氏文集』卷二七、「贈僧五首、鉢塔院如大師」に出するものである。居易は如滿大師について九年間、八關齋戒を受けた恩に酬いるため賦したものである。

百千萬劫菩提種

八十三年功德林

若不重持僧行苦

將何報答佛恩深

慈悲不瞬諸天眼

清淨無塵幾地心

每歲八關蒙九授

慙慙一戒重千金

とある中の一句を朗詠したものである。後に誦した白居易の願の偈、詩などに、「願はこの世の世俗文字云云。此身何足愛、萬劫煩惱の根云云」は、初めのは『白氏文集』卷七二「香山寺白氏洛中集記」に出ずるものである。

白氏洛中集者、樂天在洛、所著書也。（中略）我有本願願以今生世俗文字之業狂言綺語之過、轉爲將來世世讚佛乘之因轉法輪之緣也。十方三世諸佛應知。（中略）大唐開成五年十一月二日

に據るものである。ただ過を誤とし、轉を翻に改めた跡が見られるのみである。後の詩と稱するのは、『長慶集』卷

一一、逍遙詠の「亦莫^レ戀^ニ此身^一、亦莫^レ厭^ニ此身^一、此身何足^レ戀、萬劫煩惱根、此身何足^レ厭、一聚虛空塵、無戀亦無厭、始是逍遙人。」に基くもので、戀が愛と訂正されている。

僧は『法華經』方便品の「志求佛道者 無量千萬億 咸以恭敬心 皆來至佛所」の文、即ち

佛道を志求する者は 無量千萬億にして 咸く恭敬の心をもつて 皆佛の所に來至し 曾て諸の佛より 方便して説きし所の法を聞けり。(岩波文庫本上、一二六)

とある如き、宿世に諸佛の聞法者のみ、かかる法會に參會し得ることを讃える偈頌を誦し、講經、念佛、作詩等を終つて後、僧はさらに同偈の續きの「聞法歡喜讚 乃至發一言 則爲已供養 一切三世佛」、即ち

法を聞いて歡喜し讃めて 乃至、一言を發するとき

即ち、爲れ、己に

一切三世の佛を供養するなり。

の偈を朗唱して、歡喜讚歎して一言することは、三世の諸佛を供養するに等しとの經文により、詩賦の正當性を主張するのである。法會は、龍樹の「十二禮拜」の偈を誦して勸學會の最後が結ばれるのであるが、この十二禮の文は、源信の『往生要集』上末、大文第二欣求淨土の十樂の各段の終りに、「龍樹偈云」として『十住毗婆沙論中所引』の五言の偈頌と共に、十二禮文を引いている。即ち十樂中「第八見佛聞法樂」に

(1) 金底寶間池生華 善根所成妙臺座

於彼座上如山王 故我頂禮彌陀佛

(2) 諸有無常無我等 亦如水月電影露

爲衆說法無名字 故我頂禮彌陀佛

願共諸衆生

往生安樂國

と。「第十増進佛道樂」の

(3) 彼尊無量方便境 無有諸趣惡知識

往生不退至菩提 故我頂禮彌陀佛

(4) 我說彼尊功德事 衆善無邊如海水

所獲善根清淨者 願共衆生生彼國

願共諸衆生

往生安樂國

である。これは迦才の『淨土論』卷中に、「如^三禪那^四多三藏別譯^一。龍樹讚^三禮阿彌陀佛^一。文有^三十二禮^二。」(淨全六・六五五)として全文を擧ぐる中、(1)は第七偈、(2)は第九偈、(3)は第一〇頌、(4)は第一二偈廻向の文に相當する。

善導は「謹依^三龍樹菩薩願往生禮讚偈^一二十六拜當^三中夜時^二禮^一(淨全四・三六三)とある如く、殆んど全文を依用している。ただし彌陀佛を彌陀尊(以下同)とし、『十二禮文』第七偈第三句の「於彼坐上如山王」の坐を座と修正し、第一〇偈と第一一偈の顛倒があり、第一二偈の第三句の「所得」を所獲と改めている。しかるに『往生要集』は僅かな引用でわあるが、彌陀尊以外は、善導によつて修正せられた點を踏襲しながら、第一二偈の第四句は「廻施衆生生彼國」を「願共衆生生彼國」としている點、如何なる所以か知ることができない。又『二十五三昧式』には善導の六時禮讚により、十二禮偈中第十一偈を除く以外は、全部引用せられている等、これ等を通じて『十二禮文』は當時一般知識人の間に親しみを持つ、願往生の偈となつていたことであらう。

勸學會の隆替については、その發足は華ばなしいデビユーであつたに拘らず、それが永續せなかつた原因については、諸種の事柄が擧げられる。その中最も大なる障害となつたものは、その參加者のメンバーが能動的で、し

も主體をなすのは大學北堂の學生であり、下級文人貴族の子弟であつたことと、従つて勸學會の中軸となつた指導者(詩序の作者をこれに擬すれば)の名の残る者について、『本朝文粹』、『本朝續文粹』により、その歿年順に官職等を列示すれば、左の如くである。

(氏 名) (官 職) (詩 序 名) (歿 年)

紀 齊 名 大内紀式部少輔 勸學會聽法華經賦攝念山林詩序 長保元(九九九)年卒

慶 滋 保 胤 大内記 勸學會於禪林寺賦聚沙爲佛塔詩序 寛和二(九八六)年出家
長保四(一〇〇二)年卒

大 江 以 言 式部權大夫文章博士從四位下 於豫州楠本道場聽講法華經同賦壽命不可量詩序 寛弘七(一〇一〇)年卒

高 階 積 善 彈正少弼左少辨 勸學會於法興院賦世尊大恩詩序 不 明

菅 原 定 義 文章博士大學頭 勸學會隨願寺賦漸々積功德詩序 康平七(一〇六四)年卒

藤 原 敦 宗 大學頭 勸學會於尊重寺賦衆生說法詩序 天永二(一一二二)年卒

右によつて知られる如く、官廳における地位は、次官級を最高とする、官吏である。彼等が財的に乏しかつたことは、保胤の『池亭記』に言える如く、天元五年(九八二)、即ち寛和二年(九八六)出家の前四年までは、「上東門之人家」に寄居する状態であり、又黨結の徒は「貧而樂道」しむ者であつた。さらに官吏に採用せられて地方に任官分散する例も、「勸學會所欲建立堂舍狀」(國史大系二九下 三〇五)に見られる、甲州司馬刑部良秀、或いは日州刺史橘倚平の如きであつて、天延二年(九七四)、即ち結黨後十年には、「方今會之故舊。人數不幾」ざる状態であつた事情によつて知られる。

ちなみに慶滋保胤、紀齊名の詩序を作った勸學會は早期のものであり、大江以言の場合は豫州において、「結縁於彼會」來_レ至於此間_二する二三子が、任國內の一寺を選んで、講經念佛の法筵をのべて、在京時を偲んだものである。高階積善は法興院において行われた勸學會の參加者であるが、彼は詩序の文中に

近世以降。會_レ衆之鐘不_レ聞。趣_レ期之客無_レ音。月輪像前。講筵空倚_三暴露之冷壁_一。天台山下。詩境徒爲_三望雲之故境_一。廢絕之趣。自然而然。方今值_三祖構_二者不_レ幾。僧侶纔五六人。適遇_三洛陽之中_一。議以_三復舊之計_一。（國史大系二九下・二四〇）

とある。比較的定着性の多い僧侶にして、舊知の者は五六人と言う減少状態で、かなり歳月を経過し、その復舊の計を立てたことが知られる。さらに勸學會衰廢の一因として、舊會所が荒廢したことも挙げられている。従つてそれは對比的に、輪奐新裝なれる法興寺が選ばれたのである。法興院は『濫觴抄』下に「一條六年辛卯_二正曆_一七月供_三養之_一。導師大僧都眞喜任_三權僧正_一。一_{六十}」（群類二六・三二九）とある。法興院は藤原兼家が二條京極邸を寺院としたので、正曆三年（九九二）七月道兼歿し、この寺において佛事が営まれたことは、『榮花物語』卷三に「二條院をば法興院といふに、この御忌の程、多くの佛造り出で奉りて、寢殿におはしまさせ給て、八月十餘日御法事やがてそこにてせさせ給。その程の事思ひやるべし」（日本古典文學大系、上二二三）とある。

高階積善の詩序の中に「本堂破以不_レ繕。無_レ處_三相期_一。行路遠而有_レ煩。誰人必到_二とある如き、會所の荒廢と距離の遠隔を剋伏する好條件の適所を得て、復興せんとする多年の念願を達成したことについて

終入_三左相府之聽_一。相府觸_レ事重_三舊風欲_レ墜_一。每_レ道戒_三先跡之可_レ傳_一。許_三此院_二以繼_三我會_一。依_三鴻恩_二以事_三鸞王_一而已。と記している。これ勸學會の復活を意味するものとして、後に深く意識せられていることは、菅原定義の隨願寺における場合の詩序に

近來以降。有_レ故不_レ修。講席傾兮僧暫去。論談之場露滋。詩境聞兮□不_レ來。嘯咏之地風靜。結縁之徒。歎而涉_レ歲。爰延曆寺座主法師大和尚。屬_ニ寰海之清謐。備_ニ花水_一而薰修。蓋學_ニ其類綱_一。非_レ興_レ欲_レ廢哉。禪僧詞客之合_レ契。雖_レ見_ニ長元之新儀_一。山雲林月之無情。自傳_ニ康保之故事_一。〔本朝續文粹第八〕國史大系二九下・一三九

と述べ、勸學會初期の形態を傳えたことを記している。これ等を總合的に觀察すれば、左相府とは藤原道長を指すものの如くであつて、『榮花物語』ではその意味において、勸學會に關する「疑い」の記事は、道長の學事勸獎のための復興の如くであるが、しかしその年時については、菅原良義はこれを「長元之新儀」と名付るので、恐らく道長の復興説を動かぬものとすれば、萬壽四年（一〇二七）十二月道長薨時までのことであり、長元之新儀説によるときは左相府とは頼道でなければならぬ。

四、比叡の舍利會

舍利會の始行については、慈覺大師圓仁を擧げることが、慶滋保胤も指摘するところであるが、『三寶繪詞』には「舍利會は慈覺大師のはじめ行へる也」とあり、『濫觴抄』下に「清和三年庚辰_{貞觀二年}四月四日。座主仁和尙始_レ之。或云。以_ニ安樂行品_一傳_ニ法華堂衆_一。今法華懺法也。」とあるので、圓仁始行説が社會通念であつたとせられる。

圓仁の略傳が記述せられているが、その典據となつたのは、『慈覺大師傳』の抄出であつて、兩者を對比すれば左の如くである。

大師は下野國の人也。生る時に家の中に紫の雲たつ。國にひしりの僧あり。人なづけて廣智菩薩といふ。はるかに雲をみて。家にいたりぬ。父母にいましめてこの子をよくよくまもりやしなへと云。九歳にして。廣智が所にゆきぬ。

諱圓仁。俗姓壬生。下野國都賀郡人也。……

延曆十三年。大師誕生。是日。紫雲覆屋上。

家人無見者。時同郡大慈寺有僧。名曰廣智。

……德行該博。戒定具足。虛己利他。國人號廣

誓て觀音經をさぐりえたり。のちにひろく經論をさとれり。ゆめにひとりの大德來て頂をなでゝかたらふ。夢の中に人ありて云。是をばしれりや。比叡の大師なりとをしふとみる。つひに比叡にのぼりて。傳教大師をみたてまつるに。朕を合てよろこびかたらひ給事。昔夢にみし形にことならず。心にみづからしりて。人にかたらず。

承和五年にもろこしに渡ぬ。天台山にゆき。五台山にのほり。おほくの年をへて。法をもとめ。あまたの師にあひて。道をならへり。もろこしの人の云く。我國の佛法は。みな和上にしたがひて東に去ぬといひき。

承和十四年に此國に歸來て。多の佛舍利をもてわたれり。

智菩薩。廣智經行之次。遙望紫雲。謂。嘉氣非常。必可有所應。便尋雲根所起之處。是檀越王生氏家也。訪問之。家婦產兒。廣智中心獨悅。不告其祥。乃誠其父母曰。兒儻無恙。必當與我。……年及九歲。從其兄學經史。於是阿母爲愼前語付屬廣智。大師天性聰敏。風貌溫雅。身長五尺七寸。心慕佛教。寤寢思服。嘗登經藏。誓搜法文。得觀世音經。心甚敦悅焉……干時夢見一沙門。長六尺餘。顏色清明。大師致禮瞻仰。沙門含咲話語。其傍有人。問曰。汝知此大德否。對曰。不知。人曰。此是叡山大師也。大師聞之。彌增禮敬。夢覺之後。竊以傾慕之。廣智知其意。攜將大師。乃登叡山。付囑先師。時年十有五。今年大同三年也。暨于此時。仰望先師之風儀。皆如昔時之夢相……

五年六月十三日。上第一船。廿二日解纜進發……七月二日。得著大唐楊州海陵縣。……冬十月。朝使入京。大師苦請。獨留楊府。爲攀躋天台及五臺山。巡禮諸聖跡。求顯密教法也。

其年春。會商人船從越州境渡日本國。爲風所扇。到登州界。大師乘其船。遂得進發。不期之會。豈非衆聖所招哉。其秋九月。得著太宰府。

今年唐大中元年。我朝承和十四年也（續群八下、六八二—九一頁）

しかるに『日本往生極樂記』の傳文は、甚だ簡潔であるが、

閣本と比較すれば左の如くである。

三寶繪詞尊經閣本

大師下毛野國人也。生時家中紫雲立。國有聖僧人曰廣智菩薩。遙見紫雲到家。誠父母云。此子能養。九歲到廣智所。誓採得普門品。後廣悟經論。夢一人大德來摩頂語。夢中有人云。知此比叡大師也。教見。終登比叡。見傳教大師含咲悅語。昔不異夢見形心。自知不語人。

承和五年度唐。往天台山。登五臺山。歷多年求法遇數師習法。唐人云。吾國佛法皆從和尚去東。

承和十四年歸朝。持度多佛舍利。貞觀二年始行此會永傳置惣持院

『法華驗記』は頗る『三寶繪詞』に近い。いま尊經

（本朝法華驗記）

慈覺大師。俗姓壬生氏。下野國都賀郡人矣。出母胎時。紫雲覆舍。瑞鳥聚囀。廣智菩薩遙見瑞相。尋家來至。教父母言。於所生子。加敬守養。是非凡夫。瑞相如是。大師年九歲。詣廣智許誓求有緣經。探得法華經普門品。自爾以降。讀誦法花。弘學經論。解悟深理。夢見聖人摩頂與語。夢傍人告。此聖人是比叡大師。可成汝師。夢覺乃至終登叡山。始見傳教大師禮足。大師含咲歡喜無限。昔夢形自不異。隨順大師廣學顯密。

承和二年。以選入唐。往天臺山。登五臺山。多年經廻。遍謁名德。受學顯密教。大唐人言。我國佛法。和尚盡學。移傳日本矣。

承和十四年歸朝。彌陀念佛。法花懺法。灌頂舍利會。大師所傳也。凡佛法東流半是大師所傳也（續群八上、一一八）

右によつて知られる如く、文に繁簡の差は見られるが、圓仁事績の半生を記述する骨格は、全く一致している。ただ『法華驗記』が最後に擧げている「大唐人」の言と、「凡佛法東流半是大師所傳也」とは、共に重複した内容を持つ言であるが、特に承和一四年（八四七）以下の記述は、『日本往生極樂記』と一致するので、鎮源は『驗記』の撰述に當り、『三寶繪詞』をも座右において参照したことが推察せられる。

圓仁の舍利將來については、『入唐求法目錄』に

舍利五粒

三菩薩舍利盛瑠璃小瓶子
二支佛舍利盛白蠟小合子

並納白石壺子（正藏五五・一〇七六）

とある。

貞觀二年の始修については、『慈覺大師傳』に

四月始行供佛舍利會。自爾以降。此會不_レ斷。或以暮春。或以首夏。無有定日。唯作華時耳。朝士大夫。都鄙道俗。來集會場。歸命渴仰者。歲數十百人。（續群八下・六九三）

とあつて、貞觀二年（八六〇）であることは、前後の文によつて明瞭である。總持院については『九院佛閣抄』に、「在戒坦院西堦上。或名法花佛頂撫持院」とあり、その構えについては、葺檜皮多寶塔一基（胎藏界五佛安置）を中央に、東に葺檜皮方五間堂（灌頂堂、胎藏金剛大曼荼羅一楨安置）、西に葺檜皮方五間堂（眞言堂・熾盛光大曼荼羅一楨安置）、塔の前に葺檜皮廻廊三間一字、舞臺一基、更らに左右に三間の軒廊、灌頂阿闍梨房、僧房等があり、その創建頭初の美觀について、

文德天皇御願始自仁壽三年。至于貞觀四年。總十箇年所造立也。佛壇堂塔及僧坊等。構造美麗多越古今。見者發心。拜者致信。御願熾盛光法於此院修之（群類二四・五七八）

とある。また嘉祥三年（八五〇）九月の太政官符によれば、定心院に准じて十四僧を定置し、雜色五人が置れたこ

とが知られる。さらに貞元二年（九七七）二月十日の「依座主内供奉十禪師權律師法橋上人位良源奏」。比丘圓仁敬白。寺中宿福德諸院衆。應奉供養佛舍利一事」には

右佛舍利者。圓仁在大唐二日。傳法和尙等之所付授也。亦有先師所得矣云云。圓仁親見大唐盛修此會。何不我山遵行彼風。然則不可置收藏中。必應時奉禮供者云云。摠持塔下安舍利。於御願塔中。始自今年終未來際。採花燒香。道心禮供。三月花序是期焉。（同上、五八〇）

とあつて、前段は慈覺大師圓仁の見解を伝えるものであり、比叡山上には、最澄感得の舍利と圓仁大唐所傳の舍利とが、同處に收藏せられたことが知られる。

その行われる時期については、前記の引用文によつても知られるが、春の末夏の初めの好季である。

『入唐求法巡禮行記』卷三によれば、圓仁は開成五年（八四〇）五月十六日、五台山の大花嚴寺に入り、翌十七日闍院に至つて、衆僧と共に閣に上り、辟支佛の頂骨、梵夾法華經、瑠璃瓶安置の佛舍利、金字法華、小字法華を拜している。後七月二日竹林寺の西南、一高嶺を越えた金閣寺の堅固菩提院に一泊し、翌日義圓供主、及び寺中の數僧と金閣を開き、文殊菩薩の聖像、靈仙の手皮佛像、金銅塔と共に、辟支佛牙、佛肉身の舍利を拜した。七月十六日、太原府開元寺に着き、二十六日城門を出て晋山に到り、山門にある石門寺の僧、長く法花經を念じて多年、近日舍利を感得し、城内の人盡く來つて供養するに際會し、その舍利を得た初源についての見聞を記載している。八月二十日長安城の大興善寺に入つた圓仁は、資聖寺に寄住することになった。在京中會昌元年（八四二）二月八日、大莊嚴寺において釋尊の佛牙供養のことあり。『巡禮行記』卷三に

從三月八日至三十五日。薦福寺開佛牙供養。藍田縣從八日至三十五日。設无罽茶飯。十方僧俗盡來喫。左街僧錄鉢盧法師爲會主。諸寺赴集。各設珍供。百種藥食。珍妙菓花。衆香嚴備。供養佛牙。及供養樓廊下

敷設。不_レ可_レ勝計。佛牙在_二樓中_一。城中大德盡在_二樓上_一隨喜讚歎。舉城赴來禮拜供。……求法僧等十日往_レ彼隨喜。登_二佛牙樓上_一。親見_二佛牙_一頂戴禮拜。

とあつて、その盛儀の一端と「各々發願布施。莊嚴佛牙會」。向_二佛牙樓_一散錢如_レ雨」の字句により、城中の熱狂的な信仰の一斑が知られる。さらに

松樹衛西興福寺。亦二月八日至十五日開_二佛牙供養_一。崇聖寺亦開_二佛牙供養_一。城中都有_二四佛牙_一。崇福寺佛牙是那吒太子從_二天上_一將來。與_二終南山宣律師_一。一莊嚴寺佛牙。從_二天竺入腿肉裏_一將來。護法迦毗羅神護得來。一法界和尚從_二于填國_一將來。一從_二土蕃_一將來。從_二古相傳如_レ此。今在_二城中_一四寺供養

と記載せられている。即ち前記の大莊嚴寺、薦福寺の外、興福寺・崇聖寺においても行われた盛儀であつて、それぞれの舍利の傳承が物語られている。

『大般涅槃經後分』卷上「橋陳如品餘」に

爾時天人一切大衆。悲哀流淚不_レ能_二自裁_一。爾時世尊普告_二四衆_一。佛般涅槃。汝等天人莫_二大愁惱_一。何以故。佛雖_二涅槃_一而有_二舍利_一常存_二供養_一。復有_二無上法寶_一。修多羅藏。畏那耶藏。阿毘達磨藏。以_二是因緣_一。三寶四諦常住_二於世_一。能令_二衆生_一深心歸依。何以故。供_二養舍利_一即是佛寶。是佛即見_二法身_一。見_二法即見_二賢聖_一。見_二賢聖_一故即見_二四諦_一。見_二四諦_一故即見_二涅槃_一。是故當_レ知三寶常住無_レ有_二變易_一。能爲_二世間_一作_二歸依_一故（正藏一二・九〇三）と述べて、舍利崇拜と法身常住を説き、さらに同經卷下「機感茶毘品」第三に、佛陀の茶毘にあたり、「爾時四天王各作_二是念_一。我以_二香水_一注_二火令_レ滅_一。急収_二舍利_一天上供養。」せんと欲し、また「爾時海神沙伽羅龍王及江神河神。見_二火不_レ滅_一各作_二是念_一。我取_二香水_一注_二火令_レ滅_一。急収_二舍利_一住處供養。」せんとすることを思つたことにつき、

爾時樓逗諸四天王及海神等。汝注_二香水_一令_二火滅_一者。可_レ不_レ欲_二取_二舍利_一還_二本所居_一而供養_二耶_一。答言。實爾。樓

逗語ニ「四天王ニ言。汝大貪心。汝居ニ天上ニ舍利隨レ汝。若在ニ天宮。地居之人如何得ニ往而供養ニ耶。復語ニ海神。汝等住在ニ大海江河。如來舍利汝收取者。地居之人如何得ニ往而供養ニ耶。爾時四天王即皆懺悔。悔已各還ニ天宮。」

爾時大海江河神等。皆亦懺悔誠如ニ聖言。悔已各還（正藏一二・九一〇）とある。樓逗とは Anuruddha 阿菴樓駄の音略である。これ『三寶繪詞』に述べる「舍利をばねがひあらそう」異類のさまの根據をなす。

佛舍利分配のことにについて、香姓婆羅門の活躍を叙するのは、『長阿含經』卷四遊行經、（正藏卷一・二五）であつて、『佛般泥洹經』卷下（同・一七五）屯屈、『大般涅槃經』卷下（同・二〇七）は徒盧那とする。元來 Dōṇa が原語であつて、『十誦律』卷六〇は姓烟婆羅門（正藏二三・四四六）、『有部雜事』卷三九は突路拏婆羅門（正藏二四・四〇二）、『般泥洹經』卷下は毛蹶の譯語を使用している。

いま舍利配分の經過について、『遊行經』には

邊境八國。聞ニ佛滅度。舍利在ニ鳩夷國中。皆發レ兵來。索ニ舍利分。鳩夷國王曰。佛在ニ吾國。今者滅度。吾當ニ供養。遠苦枉顧。舍利不可レ得。八王答曰。吾等叉手。索ニ舍利分。了不レ與我必當以レ命抵取レ之耳。天帝見ニ八王共諍。欲得ニ舍利還國供養。化爲ニ梵志。自名ニ屯屈。叉手前曉ニ八國王曰。聽ニ吾一言。惟佛在時。諸王奉ニ尊教。常慈惠。夫爲ニ民主。無ニ宜有ニ諍。當レ行ニ四等。分ニ佛舍利。令ニ諸國土。皆有ニ宗廟。開ニ民盲冥。令レ知レ有レ佛。以爲ニ宗緒。使レ得ニ景福。天神鬼神諸王黎民僉曰善哉屯屈。普施ニ衆生福田也。共請ニ屯屈作ニ平八分。屯屈自ニ天上金甕。中以ニ石密ニ塗ニ裏成ニ量ニ舍利。各與ニ一甕。諸王得レ之。悲喜交集。皆以ニ香華懸繒雜綵燒香燃燈一朝夕作樂。屯屈長跪乞ニ甕中餘著蜜舍利。吾欲レ立廟。諸王惠レ之遂入レ甕。道士名曰ニ桓違。從レ王索ニ舍利。王曰己分不可レ復得ニ唯有ニ焦炭。便自往取。道士取レ炭。香華供養。復有ニ遮迦竭人。

來索_ニ舍利_一。曰_レ己分唯有_ニ餘灰_一。可_ニ自往取_一。卽復取_レ灰。奉九十日(正義一・一七五)

とある。卽ち佛の荼毘後、舍利は拘尸城にあつて守護せられたが、八王卽ち摩伽陀國(Magadha)・毘耶離國(Vesali)迦維羅婆國(Kapilavatthu)遮勒國(Alukappa)・羅摩聚落(Ramagāma)・毗窳(Vethadipa)・波婆國(Pava)と拘尸城(Kusinara)であつて、舍利の爭奪に兵力の出動をも辭せぬ状況を見て、天帝は屯屈(香姓)に化して調停せんとし、舍利を等分して各國土において崇拜せしみる策を提出して賛同を得、天上の金甕の中に石蜜を塗つて計量し、屯屈は蜜に著く甕中の舍利を得、道士桓達(Moliya)は焦炭を得て供養した。

この法會が如何に公家において重視せられたかについては、『三代實錄』貞觀八年(八六六)六月二日「爲_ニ延曆寺_一立_ニ式四條_一中」の第二項に

禁_下制供_ニ舍利會_一。職掌僧闕怠_上曰。舍利會者。故座主圓仁闍梨。誓以_レ護_レ國。合寺衆僧。上中下俱隨喜。連_レ名同爲_ニ檀越_一。闍梨生前。加_レ署奉行。豈至_ニ沒後_一。早致_ニ背忘_一。況是奉_ニ酬釋迦之德_一。亦乃鎮_ニ護朝家_一之事乎。而頃年差_ニ職掌僧_一。無_レ心_ニ助修_一。永代事業。何不_ニ嚴制_一。今須_下永爲_ニ公會_一。世世勤修_上。其有_ニ闕怠_一之類。一准_ニ灌頂_一。將_レ懲_ニ其意_一。(國史大系四・一八八)

とあつて、舍利會の宗教的機能については、佛恩奉酬と鎮護朝家が目的とせられているので、比叡一山を擧げてこれに參劃し、これを公會として勤修すべきことが規制せられている。

以上により天台の舍利會の始修は、『三寶繪詞』記述の如くであつて、「貞觀二年に。此會を始行ひて。總持院につたへをけり」を承け、『今昔物語』卷一一。

貞觀二年_{ト云フ}年、惣持院_{ヲ起テ}舍利會_{ヲ始行テ}、永此_ノ山_ニ傳_ヘ置_ク。多_ク僧_ヲ誦_ジ、音樂_ヲ調_テ永事_{トス}。日_ヲ定事_{无シ}、只、山_ノ花_ノ盛_{ナル}時_ヲ契_ル。(日本古典文學大系三、一九)

とあり、また卷一二にも同一趣意の記事がある。その後の推移について、同卷一二に

而間、山ノ座主慈惠大僧正、此會ヲ母ニ禮ガ爲ニ、 年ノ 月 日、舍利ヲ下奉テ吉田ト云フ所ニテ此會ヲ行フ。

多ノ僧ヲ請ジ音樂ヲ調ヘテ一日ノ法會ヲ行リ。其ノ比、微妙事コホホヒメデタキケルニナムシ（同上、一四一）

とある。欠字は『慈惠大僧正傳』によれば、天元三年（九八〇）四月とせられるが。

『紀略』後篇（國史大系一一・一三三）は、貞元二年（九七七）四月二十一日、神樂岡吉田寺において修したとする。良源の發想により、女人禁制の山上において修せられた舍利會は、廣く一般の子女に法悅を施す基となつた。ついで『紀略』後篇一三の萬壽元年（一〇二四）四月二二日の條には

天台座主僧正於祇陀林寺ニ奉レ移ニ叡山佛舍利ニ。供ニ養之。院宮。并入道大相國。關白左大臣以下。各以助成。結緣貴賤不レ可ニ勝計一。有ニ音樂舞一。（國史大系一一・二六二）

とあつて、院源の祇陀林寺舍利會に皇太后彰子、藤原道長、賴道等を初め、貴賤男女結縁群參の狀が偲ばれる。さにより具體的に表現せられているのが『榮花物語』であつて、

山の座主、山の舍利を女のおえ拜み給はぬ事いとく口惜しとて、舍利會せんとして、舍利はまづくだし奉り給へれば、世中の人く参り拜み奉る。祭はて、四日廿日餘りに、舍利會せさせ給。法興院より祇陀林という寺に渡し奉り給程の有様を、日頃いみじうとくへのしりて、小一條院、入道殿などの御棧敷をはじめ、さるべき殿ばらの御棧敷ども、いといみじく造りのしりたり。まづその御棧敷の有様ぞいみじき見物なる。その日になりぬれば、三百餘人の僧の、梵音、錫杖の音など、様くいみじくめでたく裝束きとくへて、御輿二つをさきになて奉りて、定者左右よりいみじくおかしげにて歩み續きたるに、御輿につきたる物ども、頭には兜、いふものをして、いろくのおどろくしういみじき唐錦どもを著て、持ち奉れり。樂人、舞人、えもいはぬ菩薩の顔す

がたにて、左右にわかれたる僧達に續きたり。御輿のおはします法興院より祇陀林までの道の程、いみじき寶の植木どもをおほし並めたるに、空より色々の花降り紛ひたるに、銀、黄金の香爐に、さまざまの香をたきて薫じ合せたる程、えもいはずめでたし。祇陀林におはしまして、御前の庭を、たゞかの極樂淨土の如くにみがき、玉を敷けりと見ゆるに、こゝらの菩薩舞人どもに、例の童べのえもいはずさまざま装束たる、舞ひたり。この樂の菩薩達の金・銀・瑠璃の笙や、琵琶や、簫の笛、箏など吹き合せたるは、この世の事とゆめに覺えず、たゞ淨土と思なされて、えもいはずあはれに尊くかなし。(日本古典文大系下、一五〇)

とある。恐らく此の文によつたと思われるのは、『今昔物語』卷一二「比叡山行舍利會語」第九の物語りである。

ついで『榮花物語』には、「この堂こそは御覽ぜずなりぬれば、後に佛舍利ばかりをぞ、内にも宮にも奉て奉りける」とあつて、恐らく主上や官廷女性のため、佛舍利の遷座供養が行われるようになり、『今昔物語』にも「其後、舍利ヲ内宮々々渡シ奉テ山ニ返シ送り奉ル語ヲ傳ヘトヤ」とあることにより知られる。

舍利供養は『三寶繪詞』に傳える如くインドのみの事實でなく、又圓仁の見聞する如き中國のみにおいて行われたのでなく、わが國においても古くから存在していて、信仰の歴史は古い。『日本書紀』卷二〇には、敏達天皇三年(五八四)九月、蘇我馬子は

馬子獨依佛法崇敬三尼乃以三尼付水田直與達等令供衣食經營佛殿於宅東方安置彌勒石像屈請三尼大會設齋此時達等得佛舍利齋食上以舍利獻於馬子宿禰馬子宿禰試以舍利置鐵質中一振鐵鎚打其實與鎚悉破摧壞而舍利不可摧毀又投舍利於水舍利隨心所願浮沈於水由是馬子宿禰池邊水田司馬達等深信佛法修行不懈馬子宿禰亦於石川宅修治佛殿佛法之初自茲而作(國史大系一下・一一三)

とあり、馬子は翌年二月「起塔於大野丘北大會設齋即以達等所獲舍利藏塔柱頭」とある。この舍利感得は

崇佛派に信仰と勇氣を與えて、信仰の渦擴大の一時期を劃したようである。

その後崇峻天皇元年（五八七）には

是歲百濟國遣_二使并僧惠總令_二斤惠寔等_一獻_二佛舍利_一百濟國遣_二恩率首信德率蓋文那率福富味身等_一進_レ調并獻_二佛舍利僧聆照律師令威惠衆惠宿道嚴令開等寺工太良未太文賈古子鐘盤博士將德白味淳瓦博士麻奈父奴陽貴文陵貴文昔麻帝彌畫工白加_一（同上・一二九）

とあつて、百濟國より傳來したことを特記している。

推古天皇元年（五九三）正月、「以_二佛舍利_一置_二于法興寺刹柱礎中_一」とあり、更らに推古天皇三一年（六二三）七月には、「新羅遣_二大使奈末智洗爾_一。任那遣_二達率奈末智_一。並來朝。仍貢_二佛像一具。及金塔并舍利。且大灌頂幡一具。小幡十二條_一。卽佛像居_二於葛野秦寺_一。以_二餘舍利。金塔。灌頂幡等_一皆納_二于四天王寺_一。」とあつて、この時の將來品については、その安置の場所が明示せられているので、その傳統を知ることができる。

鑑眞和上は天平勝寶六年（七五四）正月晦日入京したが、その將來品中に「如來肉舍利三千粒」の記事が見られる。

『招提千歲傳記』の法事篇に

每歲正月三日修正會 初夜後夜修_二駄都護摩供_一 又行_二舍利悔過_一 或舍利講應眞講等有_レ之。

とあり、また

每歲夏五月二日本願會 聖武皇帝之
正諱辰也 同五日六日舍利會。是卽開山忌也。昔奏_二舞樂_一。兩日之間誦_二不斷光明眞言_一。

日中修_二梵網最勝二講_一。此日自_二法華寺_一獻_レ花。傳云。光明皇后隨_二吾太祖_一受_レ戒。故爲_二報恩_一所_レ獻_二之祖前_一也。

至_レ今有_二其軌則_一。此日又有_二大齋會_一云云。（佛全一〇五・三九九）

とある。これ等の記事によれば、舍利會は釋迦の佛恩を報ずるために、唐招提寺では恒例舍利會が行われ、舍利講、

舍利悔過と稱され、舞樂、獻花が伴つたことが知られる。

天平神護二年（七六六）一〇月二一日の詔に

去六月爲_レ有_レ所_レ思。發_二苦提心_一。歸_二无_レ上道_一。因_レ有_二靈示_一。絨器虔候。遂則舍利三粒見_二於絨器_一。數月感歎莫_レ識_二所爲_一。朕聞。麟鳳五靈。王者嘉瑞。至德之世。史不_レ絶書。未_レ見全身舍利如是顯_レ形。有_レ感必通。良有_レ以也。朕以_二虛薄_一。兢懼歷_レ年。撫育乖_レ方。氷谷在_レ惕。豈念。至道凝寂。應_二微情_一而示_レ眞。圓性湛然。結_二靈光_一而表_レ質。孤園絶_レ跡。久矣驚_レ心。雙林挽_レ客。爛然滿_レ目。玄珪綠字。何以同年。西法東流。知在_二茲日_一。猥荷_二希世之靈寶_一。蓋_レ同_二衆庶之歡心_一。宜可_二文武百官六位已下及内外有位加_二階一級_一。但正六位上者。廻授_二一子_一。其五位已上子孫年廿已上者。亦叙_二當蔭之階_一。普告_二遐邇_一知_二朕意_一焉（國史大系二・三三七）

とあり、同時に特例もあつて、「授_二從五位下李忌寸元環從五位上、袁晉卿從六位上、皇甫東朝、皇甫昇女並從五位下。以_二舍利之會奏_二唐樂_一也_一」である。即ち舍利會に唐樂が奏されて、さらに法會を盛上げたことが察せられ、以後音楽が加わるを通例とする。

平安朝に入つて延暦寺、東寺、法隆寺、藥師寺、中尊寺等、廣く諸宗の大寺院において行われた。比叡山の場合『門葉記』卷九（大正藏圖像一二・三）には、山上の法華堂「毎月勤事」として、慈惠大師講、普賢講と共に舍利講の名が列ねられているので、恐らく會所はこの堂において行われたことであらう。其次第についてであるが、『門葉記』卷九五（大正藏圖像一二・四九）に「和尚御筆次第云」として、次の如き「舍利報恩講次第」が載せられている。

先兼擇_二吉日_一可_レ觸_二助成同心之人_一

次百種。財施。飲食。各注_二其式目_一。隨_二人々所望_一可_レ支_二配之_一

違_二主本意_一猥不_レ可_二宛催_一也。各當日辰刻可_レ進_二道場_一之由可_レ觸廻_一也

次兼日定_二所作人并時刻_一可_レ令_二告知_一。更不_レ可_二懈怠_一。

次堂莊嚴前夜可沙汰也

先懺法

次供養法

唱禮九方便如_レ常

讚吉慶、四智、諸天漢語

法施。法花經一卷以_レ之爲_レ眼。經了可_レ出_レ讚

次講經_{衆如_二在_二別紙_一}

法花總釋。論談_{宗要}一問二問_{可_レ隨}

已上雖_レ定_二人數_一。於兼參人者更不_レ可_レ厭_二却_一之。可_レ成_二隨喜思_一也。定_二人數_一事者。終日數多法施有_レ煩_二會合_一。

之故也。裝束隨意

次法會導師并伽陀師等參堂_{各鈍色}伶人等參祇_{先是可_レ置_二樂器等_一}

先傳供_{此間音樂}

次總禮_{四智讚、鐃鉢等如_レ常}

次音樂

次伽陀

次導師登樂。則登禮盤

次唄。散花。梵音。錫杖

次表白。神分

次式文。三段毎段音樂

次導師下樂。下座禮佛

已上百種法施者。參會之人と座と之間。隨意可勤之

次舞

次舞了被講歌披講文人在別

次狂言綺語神樂等興遊廣略在時

次各退出

とある。これが原初の形態を書留めたものであるとは速斷せられぬにしても、多くの法會の要素を傳えていると言ふことができる。

比叡山上の嚴儀は感激多きものがあるとしても、前にも述べた如く、女人禁制のため女性はその法悦に浴することができなかった。故に『三寶繪詞』には「會ををがみたてまつる人は、近くみたてまつる事を悦ぶに、山にのぼらぬ女は、よそにきく事をかなしふらん」と同情している。故に山に登れぬ女性は、唐招提寺、花山院のそれに「事をよする家々所々の女々。この二寺にまうで。舍利をおがみたてまつれ」と、結縁の尊きことを勧めている。

五、比叡の受戒

わが國における受戒の歴史は古く、『日本書紀』卷二一によれば、崇峻天皇即位の年(五八七)六月に甲子善信阿尼等。謂大臣曰。出家之途。以戒爲本。願同百濟。學受戒法。是月百濟調使來朝。大臣謂使

人曰。繼_ニ此尼等。將渡_ニ汝國。令_レ學_ニ戒法。了時發遣。使人答曰。臣等歸_レ蕃。先導_ニ國王。而後發遣。久不_レ遲也。(國史大系一下・一二五)

とあり、兩國間の交渉が成立したのは翌年である。即ち『書紀』によれば「蘇我馬子宿禰。請_ニ百濟僧等。問_ニ受_レ戒之法。以_ニ善信尼等。付_ニ百濟國使恩曇首信等。發遣學問。」とあり、同天皇三年(五九〇)「三月。學問尼善信等。自_ニ百濟還。住_ニ櫻井寺。」とあるので、善信等三尼の目的は達成したようである。これより先き、來朝僧も舒明天皇の一五年(五五四)、百濟は曇惠等九人を以て道深等七人に代らしめ、敏達天皇六年(五七七)國使大別王と共に律師・禪師・比丘尼・咒禁師の來朝があるので、數においては、授戒の法を行うに、必ずしも支障があつたとは考えられない。しかるに善信尼等三尼の留學を必要としたことは、その原因が奈邊にあつたのであろうか。すでに『書紀』の記載は、その目的を「學_ニ受戒法」とし、また「學問尼」とあることによつて、單なる「受戒」を目的とするものでなく、出家の基本的實踐條件である、戒法の徹底的理解を目的とし、従つて在留一年以上の日子を費したものと考えられる。また學問尼善信等歸朝の年には、「是歲度尼大伴狹手彥連女善德。狛夫人新羅媛善妙。百濟媛妙光。又漢人善聰。善通。妙德。法定。照善。智聰。善智。惠善光等鞍部司馬達等子多須奈。同時出家。名曰_ニ德齊法師。」の大量出家者の記載は、次の段階において受戒のことが考えられ、わが國における授戒の事實を、全面的に否定し去ることはできないと思う。

しかるに推古三二年(六二四)秋九月の一齊調査によれば、「校_ニ寺及僧尼。具錄_ニ其寺所_レ造之緣。亦僧尼入道之緣。及度之年月日也。當_ニ是時_ニ有_ニ寺四十六所。僧八百十六人。尼五百六十九人。并一千三百八十五人。」とある。この事實及び數字が、眞實を伝えるものであるか、否かの詮索は別問題として、それより先き、推古天皇二二年(六一四)八月、「大臣臥病。爲_ニ大臣_ニ而男女并一千人出家。」とつて、馬子病により千人を度した記事を指摘しておくに止める。

善信尼等の歸朝後三五年間に、教界はかくの如く膨張した事實を示すものとみられる。數の膨張は質の低下をきたし、同年四月「有_二僧_一執_二斧_一毆_二祖父_一」る如き非行僧が出現し、僧風の肅正を期して

天皇聞_レ之。召_二大臣_一詔_レ之曰。夫出家者。頓歸_二三寶_一。具_二懷戒法_一。何無_二懺忌_一。輒犯_二惡逆_一。今朕聞有_レ僧以毆_二祖父_一。故悉聚_二諸寺僧尼_一。以推_二問之_一。若事實者。重罪之。於是。集_二諸僧尼_一而推之。則惡逆僧及諸尼並將_二罪_一。於是百濟觀勒僧表上。以言。夫佛法自_二西國_一至_二于漢_一。經_二三百歲_一乃傳_レ之。至_二於百濟國_一而僅_二一百年矣_一。然我王聞_二日本天皇之賢哲_一。而貢_二上佛像及內典_一。未_レ滿_二百歲_一。故當_二今時_一。以_二僧尼未_レ習_二法律_一。輒犯_二惡逆_一。是以諸僧尼惶懼。以不知_二所如_一。仰願其除_二惡逆者_一以外。僧尼悉赦而勿_レ罪。是大功德也。(同上・一六四)

とある。「歸依三寶」と「具懷戒法」の基本的二要素に缺けた、僧侶のなせる業と解されていることは、觀勒も認める如く、「未_レ習_二法律_一」る名目僧が多かつた事實を物語るものである。孝德天皇は「崇_二正教_一光_二啓大猷_一」せんために、大化元年(六四五)八月十師の制を設置せられたが、その直接の職責は、「此十師等。宜_下能教_二導衆僧_一。修行釋教。要使_二如_レ法_一。」きことにあつた。さらに天武天皇一二年(六八四)三月には、「任_二僧正僧都律師_一。因以勅曰。統_二領僧尼_一如_レ法云云。」とあつて、これ僧界の綱紀維持に努力が拂われた事實の現れである。

鑑眞和尚の律宗傳來については、聖武天皇代の佛教隆昌の外貌の華麗さに反比例して、寺院生活の空虚さが指摘されなければならない。即ち『高僧傳要文抄』卷三、榮叡傳に

日本戒律未_レ具。受_二舍人王請_一。入唐。請_二傳戒律師僧_一。奏勅發遣。至_二洛陽_一。奏勅大福先寺大德定賓兼十德受戒畢。預_二隨_二駕長安_一。敕照議曰。本爲_二請_二傳戒律師僧_一。不_レ可_二空度_二時日_一。長安請_二僧不_レ得。下至_二楊州_一請_二得鑑眞和上及諸門人_一。(國史大系三一・八〇)

とあつて、舍人親王(六七六一七三五)の命を受け、榮叡普照は遣唐使丹治比廣成(一七三九)に従つて入唐した。よつ

て當時の日本佛教界の歛陥とするところを知ることができる。普照傳も同様であるが、定寶律師について受戒する記事を

唐開元二十一年。至洛陽^一。奏勅受戒。勅^二福先寺定寶律師^三。爲^四照等^五受戒。以^六草繫^七爲^八和上^九。讚護鵝阿闍梨。觀生威儀師。步影七尊證^{一〇}受戒^{一一}（國史大系三一・八一）

と詳記している。よつて彼等が招請のため入唐した。「傳戒律師僧」とは、傳戒の儀式作法に要する三師七證の一〇人を、その内容とするようである。『扶桑略記』卷六に

沙門榮叡。普照法師至^二唐國^三留學。太唐諸寺三藏大德。皆以^四戒律^五。爲^六入道之正門^七。若不^八持者。不^九齒^{一〇}於僧中^{一一}。爰知^{一二}本國無^{一三}傳^{一四}戒之人^{一五}。請^{一六}於東都大福先寺沙門道璿法師^{一七}。附^{一八}副使中臣朝臣名代之舶^{一九}。先令^{二〇}向^{二一}於本朝^{二二}。在^{二三}大安寺西唐院西室南端^{二四}（國史大系一二・九一）

とある。よつて、まづ道璿律師を本國に送つたので、更に楊州に轉じて鑑眞に謁して

佛法東流至^二日本國^三。雖^四有^五其法^六而無^七傳法人^八。（日）本國昔有^九聖德太子^{一〇}。曰。二百年後聖教興^{一一}於日本^{一二}。今鐘^{一三}此運^{一四}。願^{一五}（大）和上東遊興^{一六}化^{一七}（「唐大和上東征傳」群類五・五二八）

と述べて、「滄溟萬里。死生莫^二測^三」き、決死の渡海の決意を促し、遂に天平勝寶六年（七五四）甲午二月四日京に入ることを得た。その年四月、盧舍那殿前において戒壇を立て、天皇・皇后・皇太子を初め、四四〇餘人に授戒した。ついで唐招提寺を以て、「長傳^二四分律藏法勵四分律疏鎮國道場飾宗義記宣律師鈔^三。以^四持戒之力^五保^六護國家^七」（同上・五四〇）する本據とした。

すでに『東征傳』に菩薩戒を授くとあるが、その戒相は小乘四分律の條目を受持することを誓約するので、最澄は弘仁九年（八一八）五月『天台法華宗年分學生式』（六條式）を制定し、「卽得度年。授^二佛子戒^三。爲^四菩薩僧^五」すこ

とし、十九歳の時東大寺で受けた小乗二百五十戒の棄捨を宣言した。

これより先き、延暦二五年（八〇六）正月、上表して年分度者を賜らんことを請うた、その意とするところは
一目之羅。不能得_レ鳥。一兩之宗。何足_レ普及_一。徒有_二諸宗名_一。忽絶_二傳業人_一。誠願準_二十二律呂_一。定_二年分度者之數_一。法_三六波羅蜜_二。分_三授業諸宗之員_一。則_二兩曜之明_一。宗別度_二二人_一。華嚴宗二人。天台法華宗二人。律宗二人。三論宗三人。加_二小乘成實宗_一。法相宗三人。加_二小乘俱舍宗_一。然則 陛下法施之德。獨委_二於古今_一。群生法財之用。永足_二於塵劫_一（天台叢標_二一_一）（佛全・一三）

とある。その趣旨に南都の僧綱も賛同し、同年正月二六日允許を蒙る。しかるに、天台宗年分度者の實態について、大同二年（八〇七）から弘仁九年（八一八）に至る一〇年間、二四人の修學狀態であるが、初め四年間の遮那經業生光戒は「養_二老母_一不_レ住_レ山」、光仁は「巡遊修行不_レ住_レ山」、光智は「法相宗相奪」、光法は「法相宗相奪」とあり、また摩訶止觀業得度者の光忠は「死去弘仁六年夏」、光壽は「法相宗相奪」、光秀は「法相宗相奪」とある如く、僅かに住山するのは、光定ただ獨りである。かくの如くにして年分度者中、離山した者は仁弘二年の仁風（止觀業）、弘仁三年の德眞（遮那業）、弘仁四年の圓貞、弘仁五年の圓修（遮那業）、弘仁六年の道慧（遮那業）、弘仁七年の正見、正思（止觀業）の一四人に達している。その中死去一人、老母を養うための離山、巡遊修行の隨緣離山を除き、他に「別勅法相宗相奪」の正見は、その行方すら判明せぬ狀態である。かくて最澄も自衛の方策、即ち天台の門葉の育成法を必要とし、弘仁九年（八一八）五月一三日『天台法華宗年分學生式』（六條式）を作る、その中に
凡法華宗。天台年分。自弘仁九年_一。永期_二于後際_一。以爲_二大乘類_一。不_レ除_二其籍名_一。賜_二加佛子號_一。授_二圓十善戒_一。爲_二菩薩沙彌_一。其度緣請_二官印_一。

凡大乘類者。即得度年。授_二佛子戒_一。爲_二菩薩僧_一。其戒牒請_二官印_一。受_二大戒_一。令_レ住_二叡山_一二十二年。不_レ出_二

山門。修學兩業。

凡止觀業者。年年毎日。長轉長講法華。金光明。仁王。守護。諸大乘等。護國衆經。

凡遮那業者。歲歲毎日。長念遮那。孔雀。不空。佛頂。諸眞言等。護國眞言（「天台霞標」三ノ一・佛全・一三八）

と規定し、五月二日『請_下先帝御願天台年分度者。隨法華經。爲菩薩出家表』一首を上表した。それには

闕寶以西。大小別修。玄圃以東。半滿兼學。東西雖別。同期佛慧。究竟了義純圓教。一乘妙法蓮華經。制問訊於小乘類。斷_レ共住於講堂中。當今依順經制。獎勸後學（中略）乃有先帝御願。天台一宗。韻高和寡。法重人弱。獎訓未弘。鑽仰不_レ至。誠須造一家式。勸誨後學。大小別居。爭澄心道。山邑同心。竭護國忠（中略）伏望自今以後。天台年分。每年季春。三月十七日。差_二勅使一人。奉爲登天尊靈。於_二比叡山院。依大乘得_レ度。宗式如_レ別。（「天台霞標」三ノ一、佛全・一三九）

と請うて、最澄は南都諸宗との訣別を宣言し、さらに續いて、同年八月二七日『勸獎天台宗年分學生式』（八條式）、翌年三月一五日『天台法華宗年分度者回小向大式合肆條』（四條式）を制し、「今天台年分學生。并回心向大初修業者。授_二所說大乘戒_一。將爲大乘」すために、「新建_二此大道_一。傳_二流大乘戒_一。利_二益而今而後_一。固鑠_二太鐘腹_一。遠傳_二塵劫後_一」へんことを願うた。

天皇は南都の諸大德に諮問するに、護命、長慧、施平、豐安、修圓、泰圓等は上表して阻止これ努め、殊に東大寺景深は『迷方示正論』を作つて、二八失を擧げてこれに反論した。よつて同一年二月『顯戒論』三卷、『顯戒論緣起』二卷を作り、景深の二八失を反論し、ついで翌年二月これを朝廷に上り、又書を護命に遣して之れを諭す。『顯戒論』の内容は五篇、即ち第一開雲顯月篇、第二開_三示三寺所_レ有國_二篇_一、第三開_三顯文殊上座_二篇_一、第四開_三顯大乘大僧戒_二篇_一、第五開_三顯授大乘戒_二爲中大僧_上篇_一に大別され、全體で五十八條の明確な典據を出している。

最澄は弘仁一三年（八二二）餘命幾ばくもなきことを覺り、諸弟子を遺誡し、五月一五日の付屬の書に曰く、最澄心形久勞、一生此窮。天台一宗依先帝公驗授同前入唐天台受法沙門義眞己畢。自今以後。一家學生等。一事已上不_レ得違背。今且授山寺私印。院內之事。圓成佛子。慈行佛子。一乘忠。一乘叡。圓信等可_二相莊行_一。且附_二上座仁忠并長講法華師順圓_一申送。（「高僧傳要文抄」第二・國史大系三一・四〇）とある。「心形久勞。一生此窮」の心中、悲願とも言うべき、大乘戒壇の設立允許を手になかつた最澄の胸臆、推して知るべきである。

弘仁十三年歲次壬寅六月四日辰時。於_二比叡山中道院_一。右脇而入_二寂滅_一。春秋五十六也。日隱炬滅。無_レ所_二滯仰_一。風慘松悲。泉奔水咽。（同上・四一）

巨星地に墮ち、弟子の感懷思ふべきである。寂後待望の「允許大乘戒二官符」は賜つた。即ち

檢_二傳燈法師位最澄奏狀_一稱。夫如來制戒。隨_レ機不同。衆生發心。大小亦別。所以文殊豆盧異_レ位。一師十師。羯磨各別。望_二請天台法華宗_一。年分度者二人。於_二比叡山_一。每年春三月。先帝國忌日。依_二法華經制_一。令_二得度受戒_一。仍即一十二年。不_レ聽_レ出_レ山。四種三昧。令_二得_二修練_一。然則一乘戒定。永傳_二聖朝_一。山林精進。遠勸_二塵劫_一。謹副_二別式_一。謹以上奏者。被_二右大臣宣_一稱。奉_レ勅宣_レ依_二奏狀_一者。省宜_二承知依_レ宣行_一之。符到奉行

弘仁十三年六月十一日（天台叢書標二ノ一佛全・一四三）

これがその全文である。凡そこの間、前後の消息について『慈覺大師傳』によれば

先師常歎謂_二諸弟子_一曰。我朝固執_二小戒_一。未_レ入_二大乘_一。身後妙果。何以可_レ期。汝曹宜捨_レ小趣_レ大。弟子等情執不同。種性各異。執強者違_レ教背去。機熟者廻心仰慕。先_レ是大同元年冬十二月廿三日。於_二叡山止觀院_一。圓澄法師爲_二上首_一。百有餘人。授_二圓頓菩薩大戒_一。此授_二天台師々相傳大戒_一之始也。厥後時受_レ之者。弘仁八年三月六

日。又授_二德圓及大師_一矣。先師於_二叡山_一可_レ弘_二傳菩薩大戒_一之旨。奏_二聞_一。皇帝_一。皇帝知_二此戒之甚深_一。己欲_レ令_二天下_一受持_上。及_レ勅命將_レ降。十三年六月四日。先師遵化。十一日。可_レ傳_二菩薩戒_一太政官牒。給_二於寺家_一。諸弟子喜_二先師之本志既以成就_一。十四年四月十四日。中堂藥師佛像前。始受_二大乘戒_一。乃以_二師兄義眞_一爲_二傳戒師_一。以_二大師_一爲_二教授師_一(續群八下・六八五)

とある。これによれば、最澄の大同元年(八〇六)の授戒を、『高僧傳要文抄』二が一月二三日とし、『扶桑略記抄』二も一月とするのと異なる。ついで弘仁八年(八一七)三月六日、德圓及び圓仁に授けているが、滅後公許を得て一日義眞を傳戒師とし、圓仁を教授師として、根本中堂において行つたのである。

最澄はこの菩薩戒の相承論について『叡山大師傳』に

南嶽天台兩大師。昔於_二靈山_一親聞_二法華經_一。兼受_二菩薩三聚戒_一。所以師師相授。智者授_二灌頂_一。灌頂授_二智威_一。智威授_二慧威_一。慧威授_二玄朗_一。玄朗授_二湛然_一。湛然授_二道邃_一。道邃授_二最澄_一次義眞_一也(續群八下・四七二)

と口述したとある。

日本におけ受戒について、『濫觴抄』下に

平城元年丙戌_{大同}十一月。於_二乘止觀院_一圓證大法師爲_二上_前。一百餘人受戒。大戒之始也(群類二六・三一七)

とあるのは、その初回を指すものである。しかるに『釋家官班記』下に

山門受戒者。弘仁十三年六月十一日。可_レ傳_二菩薩大戒_一之由。被_レ下_二官符_一。依_二先師傳教_一。大師奏狀。依_レ之築_二戒壇_一行_二授戒_一。

和上座主義眞。是其濫觴也。其後每年二季_{四月八日}八月八日。行來于_レ今不_二斷絕_一。(群類二四・五一)

とあるのは、公許後のそれを示すものである。

毎年二期定例の受戒は、天台宗において一般の出家者に行われるものであるが、皇胤攝録の子息については、臨

時に授けられるのが慣わしとなる。『釋家官班記』には次の如くある。

貴種之人。恒例受戒之時不_ニ登山_一。必臨時行_ニ受戒_一授_レ之也。先經_ニ奏聞_一被_レ下_ニ宣旨_一也。某雖_レ無_ニ度緣資_一。可_レ令_ニ登壇受戒_一云云。以_レ之稱_ニ度緣宣旨_一也。皇胤攝錄息等者勿論也。大臣息又非_レ無_ニ例_一。近則尊教僧正冷泉相國息妙法院。

慈源僧正等也。(同上)

かくの如き手續きにより、妙法院門跡第九代天台座主藤原公相息尊教(建長七、七、二九日入滅)、道家息第七代天台座主慈源は登壇受戒したのである。

『門葉記』卷首に、仁安二年(一一六七)一〇月三日、出家した慈圓の受戒について

同十三日臨時受戒、座主明雲、先於講堂沙彌戒。自其敷筵道步行御宿所桂林房。御共澄憲實明全玄。有職能性實性慶深玄理永尊辨雅。則御下京也(正藏圖像第一二・六七)

とあり、兼實の息大峰法印良尋については、

十一月二十七日。若公御出家十一歳内大臣并二位中將令渡給直衣内大臣前駟六人。中將前駟二人。殿上人五人。

若君母屋著法衣和上東妻戸間御坐唄師辨雅法印。剃手覺玄律師。雜役良雲快成等。手長坊官作法如常。二十九日

御受戒。當日御登山。前駟二人。扈從玄理僧都。慶俊律師。快成等。參會人々辨雅法印。貞覺律師。範源己講。

有職六人。其内良雲快成著法服。參戒壇中。近來如此人三四人供奉。或水瓶或奉相副云云(同上・六八)

とある。『玉葉』卷五〇、文治三年(一一八七)七月二十五日の條に

此日、小童渡_ニ住山法印房_一去々年始行向、其後連々指令。今日永所_ニ入室_一也、二位中將車牛童遣_レ之、布衣前駟六人、衛府長忠武在_レ共、殿上人三四人許、同着_ニ布衣_一連_レ車、小童裝束蘇芳三重、縫重狩衣(童カ)地薄物、ミエタスキ、文杏葉薄濃、二藍

二重織物指貫、地龜甲、文丸文、女郎花綾單衣等也、不_レ結_レ髮、辛櫃一合、納_二手箱硯管他物等_一遣_レ之(卷三・三八六)

と、華麗な装いと、行列を整えての入寺である。

その出家の作法は一月二七日の條に

今日、小童出家^{生年十}於_二法印栗田口房_一有_二此事_一、仍午刻内府^{直衣、半部車、隨身上臈冠、騎_二移_一馬_一、前駝衣冠六人、中將^{直衣網代車、前駝二人、}相共向_二彼}

房_一家隆朝臣、能季、忠行等爲_二扈從_一申刻歸來、語云、唄師辨雅法印、剃手覺玄律師、阿闍梨良雲^{隆季卿子}快成、

成頼卿等役_二雜具_一云々、先小童着_二裝束_一、^{余調_二遣_一之_二候_一、黄青裏、(打裏)、狩襖、濃紫指貫、已上二重織物也、蘇芳切三領、青單衣、紅下袴等也、件衣以_レ濃爲_レ上也、}出_レ座、先拜_二

氏神_一、次拜_二公家_一、^{已上}次拜_二父母_一各_二拜_一了歸入、着_二法衣_一歸出、^{件法衣鈍色}法印先剃_二始_一之、後覺玄剃_レ了、師

主法印被_レ授_二袈裟_一云々、事訖大將中將共退出了、法名良尋^{法印示送云、良禪、良尋如何、余_二云_一良尋可_レ然、良禪ハ法師之名匠也、仍有_二憚敷_一云云、}余今日始儲_二

出家之息_一、機緣可_レ悅敷

と述べ、親子の濃やかな配慮と、喜びを知ることができる。その登壇受戒については、同年十一月二十九日の條に

此日、山禪師受戒登壇也。今曉、法印相具登山、執蓋役人^{藏人五位家職事光茂、侍衛府二人、}余催_二送_一之、事了入_二夜下京_一云々、後

聞受戒之間無_二違亂_一衆徒感_二禪師_一云々、悅思不_レ少

とある。

大乘戒を讃嘆することは諸經典に出ずるが、『三寶繪詞』は『梵網經』と『心地觀經』を出している。『梵網經』には金剛寶戒是一切佛本源。一切菩薩本源。佛性種子。一切衆生皆有_二佛性_一。一切意識色心。是情是心皆入_二佛性戒中_一。當當常有_二因故_一。有_二當當常住法身_一。如_レ是十波羅提木叉。出_二於世界_一。是法戒是三世一切衆生頂戴受持。(正藏

どいい、また「衆生受佛戒、即入諸佛位」位同大覺已、眞是諸佛子（同上、一〇〇四）とも讃じておる。

『三寶繪詞』には「大乘戒はあまたの經にほめ説り」として、『梵網經』と『心地觀經』の文を擧げているが、『梵網經』に云、菩薩の戒をうけざるもの畜生にことならず」以下の文は、實は『瓔珞經』に出づる文であつて、『法苑珠林』卷八九に引用して

佛子。若過去未來現在一切衆生不_レ受_二是菩薩戒_一者。不_レ名_二有情識者_一。畜生無_レ異。不_二名爲_レ人。常離_二三寶海_一。非_レ菩薩。非_レ男非_レ女。名爲_二畜生_一。名爲_二邪見人_一。名爲_二外道_一。不_レ近_二人情_一。故知菩薩戒有_二受法_一而無_二捨法_一。有_レ犯不_レ失_二盡未來際_一。若有_レ人欲_二受菩薩戒_一者。法師先爲_二解脫_一使_二其樂著_一。然後爲_レ受。又復法師能於_二一切國土中_一。教化_二一人_一出家受_二菩薩戒_一者。是法其福勝_レ造_二八萬四千塔_一。況復二人三人乃至百人千人等。福報不_レ可_二稱量_一（正藏五三・九三九）

とある。『法苑珠林』は「受戒篇」において三聚戒を説く中、第二損益即ち利益を説明するため、『善生經』、『梵網經』と共に引用せられ、その第一に擧げられている。

『大乘本生心地觀經』卷三（正藏三・三〇三）に

堅持上品清淨戒	起居自在爲法王
神通變化滿十方	隨緣普濟諸群品
中品受持菩薩戒	福得自在轉輪王
隨心所作盡皆成	無量人天悉遵奉
下上品持大鬼王	一切非人咸率伏
受持戒品雖欽犯	由戒勝故得爲王

下中品持禽獸王
 於清淨戒有缺犯
 下下品持琰魔王
 雖毀禁戒生惡道
 以是義故諸衆生

(中略)

超越生死深大海
 永斷貪瞋癡繫縛
 生死嶮道諸怖畏
 息除貧賤諸苦因
 鬼魅所著諸疾病

一切飛走皆歸伏
 由戒勝故得爲王
 處地獄中常自在
 由戒勝故得爲王
 應受菩薩清淨戒

菩薩淨戒爲船筏
 菩薩淨戒爲利劍
 菩薩淨戒爲舍宅
 淨戒能爲如意寶
 菩薩淨戒爲良藥

とあるのがその出典となる。以上の中、上中下三品の持戒者の得果について、尊經閣本と觀智院本を比較對照する

(觀智院本)

上品にたもつ者は 法王の位をえて衆生をみちびく
 中品に持は 輪王の位をえて諸の樂をうく
 下品に持は 戒をあやまちてたとひ惡道におつれども 戒
 の力すぐれたるによりて つねに其の中に王となる 諸の
 どもがらしたがひ敬て心に自在をえたり

(尊經閣本)

上品持得法王位導衆生
 中品持得輪王之位受諸樂
 下品持得輪王之位受諸樂破戒縱墮惡道戒力勝
 依其中王從敬心得自在

右によつて知られる如く、尊經閣本は前半において、下品の持戒者の得果を明す場合、『心地觀經』は下品を三段階に分ち、各おの惡道に墮しても、その中に王となるとせられ、輪王となるとはせられていないので、恐らく誤つて中品の得果を重出したものと思うので、觀智院本が正しい。しかし後半の部分は尊經閣本が出典に順じている。

(觀智院本)

生死のふかき海をこゆるには菩薩の淨戒を「ふねとす。ほんうのはけしきみちをすくるにはばさちかいを」かとりとす

貧瞋のつきしばれるをきるには菩薩の戒をときかたなとす

鬼魅のなやましわづらはすをはなるゝには菩薩戒をよき藥とすとの給へり

以上によつて明らかである。最後に『三寶繪詞』には「かねては又年穀のゆたかならむ事を祈也、提謂經の文に明也」と述べている。『提謂經』は佚失して傳わらないが、爲憲は『法苑珠林』によつて援引したものと思う。同書卷八八（正藏五三・九三二）に三齊月・六齊日について述べるなか

正月者。少陽用事。萬神代位。陰陽交精。萬物萌生。道氣養之。故使太子二月一日持齋寂然行道。以助和氣。長養萬物。故使竟三十五日。五月者。太陽用事。萬物代位。草木萌類。生畢百物。懷妊未成。成者未壽。皆依道氣。故持五月一日齋。竟三十五日。以助道氣。成長萬物。九月者。少陰用事。乾坤改位。萬物畢終。衰落無牢。衆生蟄藏。神氣歸本。因道自寧。故持九月一日齋。竟三十五日。春者萬物生。

(尊經閣本)

菩薩正戒超生死深海爲船
煩惱險道菩薩戒宿

貪瞋縛繫菩薩戒爲利刀

離鬼魅煩惱菩薩戒爲良藥

夏者萬物長。秋者萬物收。冬者萬物藏。依道生沒。天地有三大禁。故使弟子樂善者一避禁持齋。救神故爾。とある文意に基くもので、五穀豐饒を祈る意が自づから存する。

六、比叡の山の不斷念佛

平安時代の彌陀信仰、稱名念佛の法は、傳教大師最澄の天台宗開創に淵源し、その根據は『摩訶止觀』所説の常行三昧によるものではあるが、四種三昧中、特に法華三昧と並ぶ重要な行法に位置付けたのは、慈覺大師圓仁である。この彌陀念佛は中國において行われていた法則を、圓仁によつて伝えられたものであることは、『日本往生極樂記』や『法華驗記』で喧傳するところである。圓仁所傳の彌陀念佛の法は、學問的又は觀念的に彌陀の淨土を理解し、解明せんとする方途の外に、稱名念佛を主體とする宗教的實踐によつて、その本質を全體的に把握せんとするものである。即ち『摩訶止觀』の念佛は、觀稱並存、同價值的關係にあつて、行道中に前後、又は同時に修することが考えられているのに對し、圓仁の將來した念佛は、著しく變容したものである。『叡岳要記』卷上に

大師承和五年入唐。同十五年歸山。新建立常行三昧堂。仁壽元年移五臺山念佛三昧之法。傳授諸弟子等。永期未來際始修彌陀念佛。〔群類二四・五二五〕

とある。この説が正皓を得たものであるとすれば、『山門堂舎記』に言う如く

〔了敷〕

此堂元者在虛空藏尾。而相應和尚承大師遺命。元慶七年改移彼處。講堂之北也。其時西三條女御令施入幡蓋寶網資財田園等云云（同上・四七二）

とあつて、もとは虛空藏に位置していたものが、相應にあつて講堂の北に移建せられたのである。

圓仁によつて伝えられた彌陀念佛は、彌陀信仰を廣く、且つ厚い社會の各層に浸透せしめる機縁となり、寛和二

年（九八六）以前に、慶滋保胤の『日本往生極樂記』初稿の成立を見るに至つた基いをなす。西方願生者の往生の業因は多種多様であり、且つ各種の業因が合糅せられていて、その内容を分析し類型化することは、困難な作業と手續きを必要とするが、そのなか口稱念佛の源流となつたのは、不斷念佛であることは明瞭である。

『日本往生極樂記』所載の座主延昌は、「平生常曰。先_レ命終之期_一。欲_レ修_三三七日不斷念佛_一。其結願之日。我入滅之時也」と願つていたが、天德三年（九五九）二月二十四日弟子に命じて不斷念佛を始め、翌年正月一日入滅したとある。しかるに『日本紀略』後篇四、康保元年（九六四）正月一日には、「天台座主僧正延昌卒年八十五。」とあり、『扶桑略記』卷二六は寂年月を『日本紀略』により、傳文は『日本往生極樂記』を引用している。また延暦寺僧明請は晩年病み、弟子靜眞に語つて、「地獄之火。遠現_三病眼_一。念佛之外誰敢救者。須_三自他共念佛三昧_一。」とある。かくて僧侶を枕前に招請して「令_レ唱_三佛號_一」め、靜眞に語つて「眼前之火漸滅。西方之月微照。誠是彌陀引攝之相也」と述べている。この念佛三昧とは如何なる内容をもつものであるかについては、次の大僧都寛忠（九〇六—九七七）同産の姉尼某甲によつて理解せられる。即ち尼の傳に命終の時寛忠僧都に物語つて、「明後日可_レ詣_三極樂_一。此間欲_レ修_三不斷念佛_一。」とある。よつて僧都は「令_三衆僧三個日夜修念佛三昧_一」とあるので、慶滋保胤の理解においては、念佛三昧も不斷念佛もその内容は同一に使用せられている名詞であることが知られる。『拾遺往生傳』卷中の入道乘蓮（一〇四〇亡）は、嘗て「頻經_三諸司_一。任_三筑前守_一。遂歸_三花洛_一。剃_三除雲髮_一。」した經歷を持つが、「偏觀_三殘年之漸闌_一。始展_三長日之講筵_一。……其每日講說之後。必修念佛三昧。」した。この念佛三昧とは慶滋保胤と同様の理解を以て書けたものと思われる。この講筵と念佛三昧が「星霜滿_三八箇年_一。薰修向_三三千日_一。道俗男女隨喜者多矣。」とあつて、その社會的影響の大であつたことが伺われる。『後拾遺往生傳』卷中の藤原爲隆（一一三〇亡）は「數日病惱。萬法不_レ瘳。遂辭_三官職_一。偏勤_三佛事_一。同九月八日。沐浴香潔。出家受戒。相_三接僧侶_一。同音不斷念佛

合殺。已値善知識。如平生願。安住正念。乍居逝薨。」とあつて、不斷念佛と合殺が並列的に記されているので、兩者は共に曲調を有し、その間何等違和感を抱かしめないものであらう。また、同卷下の菅原順季（一〇九九亡）は、老後六箇年常に「禪僧三人許。念佛合殺之聲。常聞耳根云云」と訴えていたが、死期に及んで先立つこと七日、「嘔僧徒修念佛三昧。行法華懺法」。其第七日結願啓白之夕。自他合聲念佛合殺。其體如寢。寂而氣絕」と記されている。さらに賀茂家榮（一二三六亡）の傳には、「先其死期三箇日。嘔禪徒修彌陀念佛」。行法華懺法。（續淨六・一二八）とあるが、菅原順季と同類型とすれば、彌陀念佛とあるのは不斷念佛と解することができる。『三外往生記』の良範（一一三九亡）は「最後安住正念。不斷念佛、向西端坐氣絕」した。また甲斐國優婆塞は「漸及老耄。內有宿善。兼知死期。限百箇日。招請衆僧十人。令轉法花經。或令修彌陀念佛。」めている。江州志賀郡女（一二二〇亡）は「又衆僧打磬不斷念佛」せしめた。『本朝新修往生』の定兼（一二四〇亡）は、後に東山阿彌陀院に詣で、「此寺置不斷念佛」とある。

以上の如く不斷念佛は各時代の僧俗によつて行われたことが知られる。天台智顗（五三八―五九七）は『摩訶止觀』卷二上に四種三昧を明すなか、第二の常行三昧は般舟三昧經によつて教を立てたものである。その方法は九十日を一期として常に行道し、口常に阿彌陀佛名を唱え、心常に阿彌陀佛を念じ、この唱と念を同時に又は前後に、相繼いで休息なく修することを教示している。彌陀を唱うれば即ち是れ十方佛を唱うると功德等しうして異なることなしとあり、唱と念を双修することである。

この行法を説く『摩訶止觀』をわが國に將來したのは鑑真であつて、『唐大和上東征傳』に「天台止觀法門玄義文句各十卷、四教義十二卷、次第禪門十一卷、行法花懺法一卷、小止觀一卷、六妙門一卷」と、その名を擧げている。ついで最澄は入唐して、再度これを傳えていることは、その請來目錄に明示せられている。殊に『台州錄』に

『般舟三昧行法一卷、觀無量壽經一卷、阿彌陀經一卷』の名を見出すことは、その宗教意識の一端に觸れることができる。しかし最澄の歸國後の事蹟中、法華堂の建立は達成せられたが、その意圖したところは八條式によれば

一十二年。不出山門。令勸修學。初六年聞慧爲正。思修爲傍。一日之中。二分內學。一分外學。長講爲行。法施爲業。後六年思修爲正。聞慧爲傍。止觀業。具令修習四種三昧。遮那業。具令修習三部念誦。

〔天台叢標〕二ノ一、佛全、一四〇）

と規定せられている。よつて他の三昧道場の建立も、意圖せられていたとの推定も成立する所以である。

常行堂の建立については前述の如くであるが、その道場において修する彌陀念佛の相承については、『慈覺大師傳』に

仁壽元年。移五台山念佛三昧之法。傳授諸弟子等。始修常行三昧（續群八下、六九二）

とある。『山門堂舎記』も同様であつて、仁壽元年（八五一）は圓仁すでに歸朝後三年、常行堂の建立については、『天台座主記』によれば、嘉祥元年（八四八）六月とせられている。しかしこの年春、圓仁は歸朝後初めて入京して師跡を禮拜し、六月灌頂を行い、また傳燈大法師位、七月内供奉に任ぜられている。歸朝早々であつて完成にまで至らず、恐らく起工の事はあつたにしても、その完成を見るのは、仁壽元年の常行三昧の始修まで遅らすのが妥當である。『今昔物語』卷一一に、「貞觀七年ト云フ年、常行堂ヲ起テ不斷ノ念佛ヲ修スル事七日七夜也。」（日本古典文学大系三、一一〇）とあるのは、『山門堂舎記』に「貞觀六年正月十四日子時。慈覺大師遷化。遺言始修本願不斷念佛。」（群類二四・四七二）とあり、前出の『叡岳要記』上の如く、仁壽二年圓仁は始修し、寂後貞觀七年、相應が遺命によつて修した年を以て常行堂の建立と誤つたものである。

不斷念佛はすでに大師傳に「移五臺山念佛三昧之法」すとあるごとく、入唐見學の結果によるものである。よ

つて中國の實例についてみれば、『入唐求法巡禮行記』卷二に、開成五年

五月一日天晴。擬巡臺一去。所將驢一頭。寄在停點院。囑院主僧。勾當草料。從停點西行十七里。向北過高嶺十五里。行到竹林寺斷中。齋後巡禮寺舍。有般舟道場。曾有法照和尚於此堂念佛。有諡爲大悟和上。遷化來二百年。今造影安置堂裏。(續々群一二・二一四)

とあり、卷三にも同様の記事がある。しかし法照の死後を二年にすることが異なる。さらに「竹林寺有六院」。律院。庫院。花嚴院。法花院。閣院。佛殿院。一寺都有四十來僧。此寺不屬五台」とある。七月一日長安に向け出發するまで、山中の諸寺靈跡を巡拜した。又開成六年二月

又勅令章敬寺鏡霜法師。於諸寺傳阿彌陀淨土念佛教。廿三日起首。至廿五日。於此資聖寺傳念佛教。又巡諸寺。每寺三日。每月巡輪不絕(續々群一二・二三四)

とある。かつて法照の念佛三昧と稱する、念佛教の實踐道場である般舟道場に詣で、感激的印象を受け、改めて長安において、その實修の樣を具さに見聞することを得た。『山門堂舍記』には

念佛之軌躅邈矣大哉。昔斯那國法道和尚入定。現身往生極樂國。親聞水鳥樹林念佛之聲。和尚出定以傳彼法。首流五臺山。慈覺大師入唐求法之時登五臺山。一夏之間學其音曲。又傳敎岳。師資之所承不可輒置者也(群類二四・四七二)

とあつて、この記事は圓仁の記錄とは異り、五台山の念佛は法道の創始するところとする。また『帝王編年記』卷一四には、「寛平六年甲寅八月十一日。常行堂始修引聲念佛。彼引聲念佛者。慈覺大師於大唐清涼山謁法道和尚所傳給也。極樂法音也。歸朝之時。於船上三尊顯現。令傳成就如是也節給矣」とある。即ち『山門堂舍記』や『敎岳要記』、『帝王編年記』は法道和尚の創始、即ち極樂の法言を傳えて、旋律化した五台山流布の念佛

法を法道に直接傳えたものとしている。しかし帝王編年記に言う寛平六年（八九四）については、『山門堂舎記』には「寛平六年八月日持念堂和尚猷憲之時。始行不斷念佛」(群類二四・四八一頁)とあつて、西塔常行堂の始修説と一致する。

さて五台山念佛の法の創始者であるが、前の資料によつて知られる如く、圓仁は法照とし、その他わが國の文獻は多く法道としている。この兩者の當否、又は關係等については、現存の資料の範圍内では推定の域を出ないものであるが、法道説の最も古い文獻は、安然の『對受記』より初まる。圓仁は『巡禮行記』に法照とするので、法照について検討すれば、廬山に入り西方道場を結び、念佛三昧を修し、太暦元年（七六六）四月、每夏九旬、般舟三昧勤修の願を發し、五年四月五臺山に入り、大聖竹林寺に詣で、後并州に至り五會念佛を弘め、同九年同地龍興寺において『五會念佛誦經觀行儀』三卷を撰し、ついで五台山に歸る。太暦の末、長安に入り章敬寺淨土院に留まり、『五會念佛略法事儀讚』一卷を撰し、盛んに五會念佛を修し、朝野の歸仰を受けること甚だ厚かつた。法照の略傳を考慮し、圓仁が五台山滞在中竹林寺を中心にして、流布していた念佛の法を隨時傳え、特に長安においては、鏡霜法師を中心とする諸寺—圓仁の止住した資聖寺を含めた—の淨土念佛教に常に接する機會を得たのである。法照の寂年、享壽共に不明であるが、圓仁の入唐時を去ること遠くないことは事實で、法照は太暦（七六六—七八〇）の末、又は德宗（七八〇—八〇四）の代に長安に入つて化を布くとあるから、恐らく八世紀末、九世紀初頭には生存していたと思う。もしこの設定によれば圓仁が五台山に登つた開成五年（八四〇）五月は、法照の寂後二〇年（望月説）或は三〇年の寫誤でないかと思う。『帝王編年記』等は法道から直接傳えたとするが、殊に法道から傳えたと言ふ説が正當とすれば、法道は法照の直傳者であろう。殊に資聖寺において、再度鏡霜より念佛法の教えを受けたことは、こよなき幸運と言わなければならない。不斷念佛はわが國における實修者の例によつて知られる如く、三日又は一七日、更らには三七日修せられたこと

は、尊經閣本は「仲秋風涼之時中旬月明之程自十一日曉迄十七日夜山上二千餘僧分結四番七日七夜不斷令行也」とあり、觀智院本は割註に「故結願夜修行三七日也。唐には三七日行と云。我山には三所に分て。一七日行也。合三七日也云云。」とある。一七日に限れることは、すでに『三寶繪詞』に指摘せる如く、『阿彌陀經』に起因することであつて、圓仁と阿彌陀經については『古事談』卷三に

慈覺大師(円仁)音聲不足令レ坐給之間。以三尺八二引聲ノ阿彌陀經ヲ令レ吹傳レ給ヌ。成就如是功德莊嚴ト云所ヲエ吹セ給ハザリケレバ。常行堂ノ辰巳ノ松扉ニテ吹アツカハセ給タリケルニ。空中ニ有レ音告云。ヤノ音ヲ加ヨ云云。自レ此如是ヤト云ヤノ音ハ加也(國史大系一八・五六)

とある。さらにこの事ヲ傍證するものとして、『前唐院第一御厨子寶物實錄』に

象牙笛 一管

右五台山法道和尚入定詔極樂世界ニ。水鳥樹林所レ唱七五三等之妙曲。傳ニ五台山ニ。大師即於ニ大聖竹林寺。一夏九旬間。以ニ此笛ニ吹ニ傳件曲。移ニ叡山ニ也。

とある。これによれば「象牙笛」は、いわゆる五台山念佛法と「引聲阿彌陀經」の兩曲を傳えるのに使用せられたものと思考せられる。この阿彌陀經に説れる七日念佛を採つて、叡山の一所の常行堂において、七日を一期として不斷念佛を修し、後世三塔に常行堂が建立せられるに至つて、三七日の念佛を修することになり、それが中國において行われた、三七日の念佛に合致せられることになつたと解されている。

五會念佛とは法照の『淨土五會念佛略法事儀讚』によれば、その意義を説いて

五者會是數。會者集會。彼五種音聲。從レ緩至レ急。唯念ニ佛法僧。更無ニ雜念。念則无念佛不二門也。聲无常第一義也。故終日念レ佛。恒順ニ於眞性。終日願レ生。常使ニ於妙理。(淨全六・六七五)

という。その利益については

即於此生^一。爲^下能離^二五濁煩惱^一。除^二五苦^一斷^二五蓋^一。截^二五趣淨^一五眼^一。具^二五根成^一五力得^二菩提^一。具^二五解脫^一速能成就五分法身^上。五會念佛功力。如^レ斯最勝無比。盡^二此一形^一。頓捨^二最後凡夫之身^一。生^二極樂國^一。入^二菩薩聖位^一。得^二不退轉^一。疾至^二菩提^一。實爲^レ佛任^二此事^一。終不^レ虛也。(淨全六・六七三)

とある。その五會念佛とは五音のメロディーに緩急の次第によつて、念佛を唱和する方法であつて、その典據となるのは『無量壽經』卷上の、「清風時發。出五音聲、微妙宮商。自然相和」である。この五會念佛は、創始者が現身又は定中に、極樂の法音を傳えたという傳承説を産む所以でもある。五會とは

第一會平聲緩念

南無阿彌陀佛

第二會平上聲緩念

南無阿彌陀佛

第三會非緩非急念

南無阿彌陀佛

第四會漸急念

南無阿彌陀佛

第五會四字轉急念

阿彌陀佛

と示されている。この念佛は比叡山の常行堂を中心にして行われ、京都眞如堂にも傳えられ、現に引聲阿彌陀經と共に引聲念佛が傳えられている。鎌倉光明寺においても、毎年一〇月、十日十夜の常行不斷念佛を修するが、その起源については後土御門院が、明應四年(一四九五)觀誓祐崇を宮中に召し、この法を行わしめたことにより、勅錠によつて鎌倉光明寺に移し行うに至つたと傳えられている。しかし兩者共に現に行われている曲調は、同一の系統の分流とは、殆んど考えることができない。

七、比叡灌頂

比叡山における灌頂の起源については、延暦二三年、求法のため入唐した最澄は、唐徳宗貞元二〇年（八〇四）九月、天台山修禪寺座主道邃、佛隴寺座主行滿について台教をうけ、一〇月一三日天台山脩然について禪法を傳え、さらに翌年三月二日、道邃について圓頓菩薩戒を受け、四月上旬さらに眞言を求めんために越州龍興寺に向つた。

『叡山大師傳』には

幸得_レ値_二遇泰岳靈巖山寺鎮國道場大德内供奉沙門順曉_一。順曉感_二信心之願_一。灌頂傳受。三部三昧耶圖樣。契印法文道具等。目錄如別。順曉闍梨付法書云。大唐國開元朝。大三藏婆羅門國王子。法號善無畏。從_二佛國大那蘭陀寺_一。傳_二大法輪_一。至_二大唐國_一。轉付_二屬傳法弟子僧義林_一。亦是國師大阿闍梨。一百三歲。今在_二新羅國_一。傳_レ法轉_二大法輪_一。又付_二大唐弟子順曉_一。是鎮國道場大德阿闍梨。又付_二日本國供奉大德弟子僧最澄_一。轉_二大法輪_一。僧最澄是第四付囑傳授。唐貞元廿一年四月十九日書記。令_二佛法永永不絕_一。阿闍梨沙門順曉錄付_二最澄_一（續群八下、四六六）

と付法文を傳えているので、その傳燈の譜脈と事實は明瞭であり、殊に『天台霞標』二之一所載の「眞言付囑目錄」には

向_二越州龍興寺_一。求_二眞言等并雜教迹等一百二部一百一十五卷_一。灌頂道具白銅五鈎。拔折羅壹口。灌頂道具白銅五鈎金剛鈴壹口。灌頂道具白銅金剛輪貳口。灌頂道具白銅羯磨拔折羅貳口。灌頂傳法阿闍梨順曉和上付法印信。灌頂道具白銅三摩耶拔折羅一口（佛全、八）

とある。かくて歸朝の年九月、和氣弘世に勅し高雄山寺に法壇を建立し、わが國において初めて祕密灌頂が行われた。即ち傳記によれば、

又弘世奉 勅。眞言祕教等。未_レ得_レ傳_ニ此土_一。然最澄闍梨幸得_ニ此道_一。良爲_ニ國師_一。宜_レ拔_ニ諸寺智行兼備者_一。令_レ受_ニ灌頂三昧耶_一。因_レ茲。於_ニ高雄山寺_一。始建_ニ立法壇_一。設_ニ備法會_一。勅使小野朝臣岑守檢_ニ校諸事_一。勅召_ニ畫工上首等廿餘人_一。敬圖_ニ毗盧遮那佛像一幅。大曼荼羅一幅。寶蓋一幅_一。又縫_ニ造佛菩薩神王。像幡五十餘旒_一。莊嚴調度。出_レ自_ニ內裏_一。又臣弘世奉 勅口宣。法會所用。不_レ論_ニ多少_一。隨_ニ闍梨言_一。皆悉奉_レ送。唯除_ニ國內本無耳_一。是時。奉 勅所_ニ簡定_一諸寺大德。道證。修圓。勤操。正能。正秀。廣圓等。忽被_ニ內侍之宣_一。各竭_ニ尊師之法_一。受_ニ金剛之寶戒_一。登_ニ灌頂之眞位_一矣(續群八下、四六七)

とあつて、畫工廿餘人を召して毘盧舍那佛像、大曼荼羅、寶蓋各一鋪を圖し、佛菩薩神像、幡五十餘旒を縫造し、諸寺の諸大德を簡んで祕密灌頂を受けしめ、法會所用のものは本國において調えられる限りはすべて、國費によつて最澄の求めに應ぜしめられ、盛儀によつてその濫觸が飾られている。『類聚國史』卷一七八に、その時の受法の弟子は「修圓勤操等七人」とし記載している。

慈覺大師圓仁は入唐中、開成五年(八四〇)長安において元政阿闍梨に金剛界の大法を學び、五瓶の灌頂を受け、金剛界大曼荼羅を畫き、會昌元年(八四二)夏、青龍寺義眞に從つて胎藏灌頂壇に入り、毘盧遮那經の眞言印契を學び、微細儀軌及び蘇悉地の大法を受け、又玄法寺法全に胎藏儀軌を稟ける等、祕密教の相承に大いに努めた。即ち『慈覺大師傳』には

到_ニ大興善寺翻經院_一。謁_ニ對元政阿闍梨_一。請以爲_レ師。儲_ニ備供具_一。入_ニ灌頂道場_一。奉_レ供_ニ諸尊_一。始學_ニ金剛界大教_一。更受_ニ五瓶灌頂_一。及圖_ニ寫金剛界大曼荼羅_一。時先師夢中歡喜曰。善哉々々。汝圖_ニ寫此曼荼羅_一。將來示_レ我。明年至_ニ青龍寺_一。從_ニ義眞阿闍梨_一。入_ニ胎藏灌頂道場_一。始學_ニ毘盧遮那經中眞言印契。并眞言教中祕密法要_一。受_ニ蘇悉地大法_一。圖_ニ畫胎藏大曼荼羅_一。(中略)次向_ニ玄法寺_一。從_ニ法全阿闍梨_一。習_ニ胎藏儀軌_一。(續群八下、六八九)

とあり、歸朝後圓仁は嘉祥元年（八四八）奏して灌頂法を修す。即ち『傳』に

山中相共願_レ受_三灌頂法_一。大師奏請。奉_三爲_二國家_一。修_三灌頂法_一。六月十五日。太政官送_下應_レ修_三件法牒於寺家_上（同上、六九一）

とあり、さらに翌年新造の胎藏界金剛界兩曼荼羅の功終るを待ち、灌頂を修した。その奏狀の末尾に

圓仁準_三佛所說_一。擇_三勸_三曜宿_一。至_三于良日_一。實爲_レ難_レ得。伏望。屬_三年_三三長齋_一。來五月甘露八日。奉_三爲_二聖朝_一。修_三灌頂法_一。上_三翊_二聖躬_一。延_三寶算於無量_一。下_三勸_三器性_一。傳_三法燈_二而不_レ絕。謹錄奏聞（同上、六九二）

とある。傳文には「至_三于此日_一」。初修灌頂。即令_三內藏寮_二供_三一千僧_一也。詔_三參議左大辨伴宿禰善男_二檢_三校其事_一。受_三三昧耶戒_一者一千餘人。於是大師及山衆各抗_三表奉賀_一したことを記している。『三代實錄』卷八、貞觀六年（八六四）正月一四日、圓仁の傳を記する中

承和十四年九月還_三此土_一奏_三聞天子_二請_三奉_二爲_二國家_一修_三灌頂_一每年永修鎮_中護聖境_上詔依_レ請焉嘉祥二年五月於_三延曆寺_一始修_三灌頂_一官給_三一千僧供料_一用_三內藏寮物_一勅遣_下參議從四位下守右大辨伴宿禰善男_二檢_上校_上而飲_三誓水_一者一千餘人（國史大系四・一二六）

とあつて、官廳の記録も同一内容である。

『三寶繪詞』に「嘉祥元年に。又慈覺大師公家に申て官符を下て。（中略）ながくこの山にして公家の御ために傳へをこなへる也」とあるが、『濫觴抄』下に天台灌頂について

仁明十六年戊辰_{嘉祥元}。六月十五日慈覺大師表云。南岳惠思禪師後身聖德太子。以_三不世之德_一轉_三生此國_一。先師寂澄

十有五年禪念之暇。披_三覽經教_一。遂知_下天台止觀與_三眞言法_一義理冥符_上。隨緣宣傳等。乃至圓仁去承和五年遇_三不

空弟子全雅阿闍梨_一。於_三天台第七資志遠和尚_一稟_三三觀之旨_一。六年之間等文。同十七年_{嘉祥二年}。五月於_三延曆寺_一始_三

修之。(群類二六・三二〇)

とあるのが参照せられる。

比叡山における灌頂堂は總持院にあつて、總持院は『山門堂舍記』に「在_二戒壇院西埴上_一。或名_二法華佛頂總持院_一」と所在の地を示し、建造物としては「葺檜皮多寶塔一基。安置胎藏五佛」。同五間堂一字。灌頂堂也。塔東。安置胎藏金剛曼荼羅一楨。同方五間堂一字。眞言堂也。塔東。安置熾盛光大曼荼羅一楨。同三間昇廊東西各一字。同廻廊舞臺一基。在_二塔前_一。同五間門樓一字。有_二左右橋_一。同三間近廊左右各一字。同七間灌頂阿闍梨房一字。文德天皇御願。始_レ自仁壽三年_一至_二貞觀四年_一十ヶ年所_二造立_二也_一」(群類二四・四七五)とあつて、灌頂堂の位置は多寶塔の東にあたる。

圓仁は嘉祥三年(八五〇)春奏して

除_レ災致_レ福。熾盛光佛頂。是爲_二最勝_一。是故唐朝道場之中。恒修_二此法_一。鎮_二護國基_一。街西街東。諸内供奉。持念僧等。互相爲_レ番。奉_レ祈_二寶祚_一。又街東青龍寺裏。建立_二皇帝本命道場_一。勤_二修眞言祕法_一。今須_下建立_二持念道場護摩壇_一。奉_二爲_二陛下_一。修_中此法_上。唯建立之處。先師昔點定矣(續群八下・六九二)

と。よつて詔して「朕特發_二心願_一。於_二彼峯_一。建立_二總持院_一。興_二隆佛法_一」とある。「於_レ是勅總持院安置十四僧。永令_二修法_一」と記述するのは『三代實錄』の記載である。しかし『叡岳要記』上は前述の如く、十ヶ年の歳月を要し、「佛壇堂塔及僧房等構造美麗多越_二古今_一」。見者發心。拜者致_二信_一す如き、輪奐の善美を具える途上にあつたが、嘉祥元年(八四八)九月一日、定_二總持院拾肆僧事の太政官牒_一、同九月一六日總持院供料事、仁壽三年(八五三)五月七日宛_二總持院燈分油并供料事_一、同一〇月一二日宛_二總持院雜色五人合_一事等の官牒が延暦寺に下されて、眞言祕法は勤修せられたが、完成後の貞觀六年(八六四)一〇月一日「出_下舉宛_二延暦寺總持院料穀七百石_上」事の官牒も下されていることは、この總持院が朝廷によつて如何に重視せられていたかが伺える。

また『三代實錄』貞觀八年（八六六）六月二一日の條に、「爲延曆寺立式四條」とある、その一は『天台叢標』には

禁下制修灌頂二日。職掌僧闕急上曰。灌頂法者。鎮國御願。修來尙矣。而年序既積。人心漸薄。遂使差下職掌僧。多致辭退。辨行諸事。人功粗乏。若不立法制者。後代何修。今須一年不參者。一年不聽齒衆。二年急闕者。永不預衆例。亦拘階業。既遂階業之輩。一年不參。至於擬補。一年抑止。既得所之類。有闕急者。觸寺家所請之事。一切不判行。但沈重病。及居師僧父母喪者。不在此限（佛全・二七二）とある。僅か總持院造立の貞觀四年を去ること數年にして、この官制が出されたことは、職掌僧の人心の弛緩のみでなく、鎮護國家の行事として重んぜられる意圖が含まれていると見るべきであらう。

承和一〇年（八四四）十一月一六日の太政官符に

夫於灌頂有結緣。有傳法。結緣者謂隨時官進者皆授之。傳法者謂簡人待器而方許之。若衆中有稟學兩部大法及宗義并五種護摩法等。修練加行堪爲師範者。先受阿闍梨位者。覆審試定。錄其名簿。別當署奏聞。然後待報答。令其宗長老阿闍梨於東寺授與傳法職位。（國史大系二五・六八）

とある。結緣灌頂について、承和一三年（八四六）三月一五日の太政官符は、「應停春節灌頂永成修法事」であつて、實惠の奏聞によるところである。その内容は

依太政官去承和十年十一月十六日符。自去十一年三月十五日、始行春秋灌頂。而寺家之務。觸類繁多。左右兼行。事頗擁滯。望請。停春秋灌頂。永成修法。即以灌頂料。充修法具。但秋來一廻。恒行灌頂。敬爲國家修二件二法二者（同上・六九）

とあつて、これ以後東寺において春は修法、秋は灌頂を行うこととせられた。

八、霜月會

霜月會奉修の趣旨は、天台大師智顗（五三八—五九七）報恩の行事である。『三寶繪詞』には『唐高僧傳』卷一七によつて事蹟が抄記せられているが、初めに「陳隋兩代の帝師」とは、『續高僧傳』によればの後主の歸依について

陳帝意欲_二面禮_一。將_レ申_二謁敬_一。顧_二問群臣_一。釋門誰爲_二名勝_一。陳暄奏曰。瓦官禪師德邁_二風霜_一。禪鏡_二淵海_一。昔在京邑。群賢所_レ宗。今高_二步天台_一。法雲東謁。願陛下詔之還_レ都。使_二道俗咸荷_一。因降_二靈書_一。重沓徵入。顗以_二重法之務_一不_レ賤_二其身_一。乃辭_レ之。後爲_二永陽苦諫_一。因又降_レ勅。前後七使。並帝手疏。顗以_二道通惟人王_一爲_二法寄_一。遂出_レ都焉。迎入_二太極殿之東堂_一。請_レ講_二智論_一。有_レ詔羊車列_二導於前_一。主書舍人翊從登_レ陛。禮法一如_二國師_一。璫闔梨故事_一。陳主旣降_二法筵_一。百僚盡_レ敬（正藏五〇・五六五）

と述べられている。さらに隋帝とは煬帝（晋王廣）の要請により、授戒した事實を指すものであつて、晋王方希_二淨戒_一。如願_二唯諾_一。故躬制_二請戒文_一云。（中略）今開皇十一年十一月二十三日。揚州總管寺城設_二千僧會_一。敬屈授_二菩薩戒_一。戒名爲_レ孝、亦名_二制止_一。方便智度歸宗奉極。作_二大莊嚴_一。同_二如來慈_一。普_二諸佛愛_一。等視_二四生_一。猶如_二一子_一云云。即於_二內第_一躬傳_二戒香_一。授_二律儀法_一。告曰。大士爲_レ度遠濟爲_レ宗。名實相符義非_二輕約_一。今可_二法名爲_二總持_一也。用攝_二相兼之道_一也。王頂_二受其旨教_一曰。大師禪慧內融。導之法澤。軌奉_レ名爲_二智者_一とあることに依り知られる。かくの如き歸仰を得た智顗の内證について、自ら語つて「吾不_レ領_二衆必淨_一六根。爲_レ他損_レ己。只是五品內位耳」（正藏五〇・五六七）とある。

『三寶繪詞』に收載する天台大師の略傳を、『續高僧傳』より檢出すれば、

及誕育之夜。室內洞明。信宿之間其光乃止。内外胥悅。盛陳鼎俎相慶。乃火滅湯冷。爲事不成。忽有二僧扣門曰。善哉兒德所熏。必出家矣。言訖而隱。……七歲喜住伽藍。諸僧訝其情志。口授普門品。初契一遍即得。……年十有八。投湘洲果願寺沙門法緒而出家焉。緒授以十戒。導以律儀。……又詣光州大蘇山慧思禪師。思每歎曰。昔在靈山同聽法華。宿緣所追今復來矣。即示普賢道場。爲說四安樂行。顓乃於此山行法華三昧。始經三夕。誦至藥王品。心緣苦行。至是真精進句。解悟便發。見共思師處靈鷲山七寶淨土。聽佛說法。故思云。非爾弗感。非我莫識。此法華三昧前方便也。又入熙州白砂山。如前入觀。於經有疑。輒見思來冥披釋。爾後常令代講。聞者伏之。……乃夢巖崖萬重雲日半垂。其測滄海無畔。泓澄在子其下。又見一僧搖手申臂至于峽麓。挽顓上。山云云。……卽往天台。旣達彼山。與光相見。卽陳賞要。光曰。大善知識。憶吾早年山上搖手相喚不乎。顓驚異焉。知通夢之有在也。時以陳太建七年秋九月矣。(同上)

とある。次いで陳隋兩代の帝師となつたことについては先述の如くである。命終に關する記事の典據は

又勅維那。人命將終。聞鐘磬聲。增其正念。唯長唯久氣盡爲期。云何身冷方復響。世間哭泣著服皆不應作。且各默然。吾將去矣。言已端坐如定而卒於天台山大石像前。春秋六十有七。卽開皇十七年十一月二十二日也。滅後依有遺教而殮焉。(同上)

とある。滅後の靈異について、『佛祖統記』卷六には

安坐在外經歷十日。道俗奔赴號泣遶拜。入龕之後流汗遍身。將昇歸佛隴。連雨不休。弟子咒願乞加神力。纔舉禪龕。應時開霽。乃於寺西南峯一起墳奉藏。從先囑也(正藏四九・一八五)

とあり、後者の物語については

以三十一月二十四日忌辰。度三十九僧三設三千僧齋。有司案名滿三足千數。臨齋受レ呪則數溢三一人。咸謂三智者化身來受三國供。是日午後使人同三大衆開三視靈龕。唯空床虛帳而已。使者反命。帝謂三群臣曰。智者是朕戒師。先多三靈異。朕於三仁壽元年令三張乾威往視三龕室儼然。今盧正方往則靈體不レ可復見。既從三變化得道非レ虛(同上、一八五)

と詳説せられている。『天台靈應圖本傳集』卷二には

身吳州張達等。大佛光明滿レ山。直入三房內。兼聞三異香天樂。安坐十日。斂三乎禪龕。則遍身流レ汗。方能歸三佛隴之。連雪不レ止。弟子咒レ之。當レ時開齋。

とあり、更らに「碑云。」として

大業元年九月。幸三江都遣三舍人。送三弟子知瓌。赴三師忌齋。與三寺衆同開三石室。唯見三空牀。本設三千僧齋。點レ名。忽贖三一人。及三再巡檢。又唯千人。及三至三喰嚙。又贖三一人。皆以爲師化身來受レ供耳。便廻具奏。帝深着感。百官皆賀焉。其餘靈跡。不レ可三勝言。(傳教大師全集四・二五二)とある。

天台智顗の著述は、多く弟子章安灌頂の筆録せるもので、章安については『佛祖統記』卷七に

年二十受三具戒。天縱慧解一聞不レ忘。陳至德初

陳後主

謁三智者於三修禪寺。喜受觀法三研釋既久。頓蒙三印可三因爲三

侍者三隨三所住處。所說法門悉能領解。禎明元年。隨三智者止三金陵光宅三聽三講三法華

文句注云。二十七。聽受金陵

隋開皇十三年

帝夏受三法華玄義江陵玉泉

時年三十三。次在江陵。奉蒙玄義是也

十四年夏。受三圓頓止觀於玉泉

一夏敷揚。時慈暉是也

至三於餘處講說。聽受之

次悉與結集。大小部帙百有餘卷。傳三諸未聞三皆師之功也(正藏四九・一八六)

わが國における霜月會の始源について、『釋家官班記』下に「延曆廿年十一月十四日。傳教大師於止觀院大安。靈雲。藥師。慈光。東大。始修之。至廿三日二十ヶ日第五日豎義。豎者義眞。證義三人。圓寂法相。靈雲。慈光。東大。とある。即ちこの歴史事象の經過を『叡山大師傳』には

（延曆）十七年冬十一月。始立三十講法會。年年無闕。後後豈絕哉。爲傳法二事。常自思惟。國有二七大寺一。寺有二六宗一。宗有二博達之人一。人有二強弱之智一。雖知二卑小艸菴不能容龍象一。而莊嚴一會之小座。屈二請十箇之大德一。講二演三部之經典。聽二聞六宗之論鼓。是以二十年十一月中旬。於二比叡峰一乘止觀院一。延二請勝猷。奉基。寵忍。賢玉。歲光。光證。觀敏。慈詰。安福。玄耀等十箇大德續群八下、四六〇）

とある。よつて法華十講は延曆十七年（七九八）十一月十四日より始修せられ、延曆二十年には上記の如き十大徳を屈請して、「各講二一軸一」ずることとし、『三寶繪詞』に言う如く、十日の講會を終つて、二十四日天台大師供を行うことを恒例とした。しかるに『今昔物語』卷一には「亦、大師、毎年十一月廿一日講堂ニシテ、多僧ヲ請シテ、法華經ヲ講シテ法會ヲ行フ事五箇日、此、唐ノ天台大師ノ忌日也。一山ノ營ミトシテ于今不絶。比叡山ヲ建立シテ天台宗ヲ立ツ、偏ニ彼大師ノ述ヲ追ヘル也。然レバ、其恩ヲ報ル爲メ始ニ行ヘル也。」（日本古典文學大系、三、一〇八）とあつて、五箇日に改められていることが知られる。

十一月二十四日に修せられる天台大師供は、『山門堂舎記』に「仁壽四年十一月廿四日慈覺大師依二國清寺風一始修天台大師供。智者大師爲二本。遍禮供二天竺震旦日本顯密祖師也一」（續群八下、四七三）とあり、『叡岳要記』上も同様に記載している。『入唐求法巡禮行記』卷一には

十九日爲二宛一廿四日天台大師忌日設齋。以二絹四疋綾三疋一送二於寺家一、留學僧絹二疋。請益僧綾三疋絹二疋、具レ狀送二寺家一畢。具在二別紙一。賣買得二六貫餘錢一。廿四日堂頭設レ齋。衆僧六十有餘。幻群法師作レ齋。難二久食一

儀式也。衆僧共入_二堂裏_一。次第列坐。有_レ人行_レ水。施主僧等於_二堂前_一立。衆僧之中有_二僧打槌_一。更有_二僧作梵_一。々頃云々。何於_二此經_一。究竟_二到_二彼岸_一。願佛開_二微密_一。廣爲_二衆生_一說。音韻微妙。作梵之間。有_レ人分_レ經。梵音之後。衆共念_二經_一。各_二一枚許_一。即打槌轉經畢。次有_二僧_一。唱_二敬禮常住三寶_一。衆僧皆下_レ床而立。即先梵音師作梵。如來色無盡等一行文也。作梵之間。綱維令_二請益僧等_一。入_レ裏行香。盡_二衆僧數_一矣。行香儀式與_二本國_一一般。其作_レ齋晉人之法師矣。先衆起立。到_二佛左邊_一。向_レ南而立。行_レ香畢。先歎佛。與_二本國咒願初歎佛之文_一不_レ殊矣。歎佛之後。即披_二檀越先請_一設_レ齋狀_一。次讀_二齋歎之文_一。讀_二齋文_一了。唱_二念釋迦牟尼佛_一。大衆同音稱_二佛名畢_一。次即唱禮。與_二本國_一普_二爲天龍八部諸善神王等_一唱_二一般_一。乍立唱禮。俱登_レ床坐也。讀_二齋文_一僧并監寺綱維及施主僧等十余人。出_二食堂_一。至_二庫頭_一齋。自外僧沙彌。咸食堂齋。亦於_二庫頭_一。別爲_二南岳天台等和尚_一。備_二儲供養_一。衆僧齋時有_二庫司僧二人_一。辨_二備諸寺_一。唐國之風每設齋時。飯食之外別留_二料錢_一。當_二齋將_一竟。隨_二錢多少_一。僧衆僧數等分_二與僧_一。但贈_二作齋文_一人_上。別增_二錢數_一。答於_二衆僧_一各與_二卅文_一。作_二齋文_一者與_二四百文_一。並呼_二淨_一儼錢計。與_二本國_一普_二布施_一一般。齋後同於_二一處_一嗽_レ口。歸房。(續々群一二、一七四)

とある。この法會は圓仁・圓載が施主となり、幻群法師が齋文、式次第を作つて行つた、楊州開元寺の開成三年(三八)十一月二四日の天台大師忌の記述である。式次第は衆僧・施主の入堂に初まり、作梵、分經、轉經、次ぎに一僧「敬禮常住三寶」と唱え衆僧起立。梵音師の作梵、施主の行香、法師の歎佛偈、次いで設齋を請う狀の披讀、齋歎文、唱念、唱禮等と進められ、この後、齋文を読む僧并監寺・綱維の役僧、施主等十餘人は共に庫裡に至つて齋食をとり、その他の衆僧は食堂において齋し、齋後一處において嗽口、歸房して、全ての法要が終つたのである。

以上の中國における大師供が基本となつて、天台大師供祭文と次第式の製作となつたのであろうか。『天台觀標』三ノ一には「祭_二智者大師_一文」と「天台大師忌次第式」を擧げている。

先僧衆參堂

次讚衆僧讚云云

歸命頂禮。大唐國中。天台大師聖靈。哀愍攝受所設供。證知大衆三業禮。

歸命頂禮。大唐國中。南岳大師聖靈。哀愍攝受所設供。證知我等至心禮。

歸命頂禮。天竺震旦日本國中。眞言止觀大師等。哀愍攝受所設供。感我歸命一心禮。

次佛名教化云云

次獻茶

次祭文

次畫讚

次獻茶

次六種供養

次佛名教化云云

これである。この次第によれば、祭文と畫讚が法會の重要な位置を占めるもので、この爲に用意せられたのが祭文である。現在台家において行われる天台大師御影供は、これに據つてゐることが知られる。

天台大師御影供は、僧衆參堂、次伽陀とあつて、

此之止觀 天台智者 說己心中 所行法門 即時德一切 現諸身三昧 勤行大精進 捨所愛之身 應以天華散

天衣覆其身 頭面攝足禮 生心如佛想

の文が擧げられてゐる。つぎの佛名教化は二に分け、佛名は「南無歸命頂禮天台大師 還念本誓來影向」であり、教

化は

「迎佛ノ香ノ煙リ只今ヤ大師ノ寶刹ニ薰スラム」五分法身句ヲ添ヘテ影向シ給ハ貴物ナリケリ謹テ奉勸請或云云之
已下同
一乘ノ流布ヲ思ヘハ大師ノ弘經コソ勝レタリ」靈山ニ親シク聽テ佛意ヲ弘メ給ヘハマサリケレ」三觀ノ相承ヲ訪
ヘハ高祖ノ遺訓イイサシコソ貴カリケレ」衡岳ニ師ニカハリテ圓解ヲ發シ給ヘハマサリケレ謹奉讃嘆
と示され、この教化了つて「南無還念本誓來影向」の詞を云つて一禮する。祭文は略されているが、畫讃は次のよ
うである。

陳隋二代三朝國師 天台智者大師畫讃

光祿大夫太子大師顏魯公文

天台大師俗姓陳

同音 其名智顗華容人

隋煬皇帝崇明因

號爲智者誠敬申

師初孕育靈異頻

綵煙浮空光照隣

堯盾舜目熙若春

禪慧悲智嚴其身

長沙佛前發弘誓

定光菩薩示冥契

悅如登山臨海際

上指伽藍畢身世

東謁大蘇求真諦

智同靈鷲聽法偈

得宿命通辯無礙

旋陀羅尼華三昧

居常面西化在東

八載瓦官聞玄風

敷演智度發禪蒙

梁陳舊德皆仰宗

遂入天台華頂中

因見定光苾芻夢

降魔制敵爲法雄

胡僧開道精感通

又有聖賢垂祕旨

時平國清卽名寺

贖得魚梁五百里

其中放生講流水

後主三禮彤庭裏

請爲菩薩戒弟子

煬皇出鎮臨江涘

金城說會求制止

香大事訖迺西旋

諸官聽衆踰五千

建立精舍名玉泉

橫亘萬里皆稟緣

煬皇啓請廻法船

非禪不智求弘宣

遂著淨名精義傳

因令徐柳參其玄

帝旣西朝趨象魏

師因東還遂初志

半山忽與沙門值

俄頃逡巡復輟秘

一時月夜如論議

初夢塔壞胡僧至

又爲南獄說三智

自言必當終此地

帝十七年歸江都

遣使奉迎師北但

山下規盡爲寺圖

王家所辨事不孤

石城天台西門樞

正好修觀形勝殊

像前羯磨依昔符

寄帝如意華香爐

打上段

助音

第五法師階位絶

觀音下迎彰記前

萬行千宗寂後説

跏趺不動歸寂滅

天雲決潚風慘烈

草木低垂水鳴咽

十日容顏殊不別

遍身流汗彰異節

欲歸佛龕西南峯

泥濘載塗那可從

門人瀝懇祝眸容

應手雲開山翠濃

于嗟此地慙僧龍

空餘白塔間青松

每至忌辰因命重

何時道俗不慙々

歲々開龕儼容質

最後如何忽亡失

齋場數僧十贖一

呼名點之又如實

受食行懶還復溢

迺知神靈叵談悉

千變萬化難致詰

若欲書之無終畢

止觀大師名法源

親事左溪弘度門

二感灌頂誦師言

同稟恩文龍樹尊

荆溪妙樂間生孫

廣述祖教補乾坤

寫照隨形殊好存

源公瞻禮心益敦

俾余讚述斯討論

庶幾億載垂後昆

これである。次の六種供養とは

敬禮常住三寶。 敬禮一切三寶

我今歸依 天台大師 諸大師等

今日所獻 香花燈明 餅菓茶藥

種々饍饌 三業禮拜 恭敬供養

大慈大悲 哀愍納受 願於生々

以一切種 淨妙供具 供養恭敬

無邊三寶 自他自證 無上菩提

と、導師は香呂を取つて磬を一打して誦す。次の佛名は「南無恭敬供養天台大師哀愍接受護持願」であり、教化は又次の如くである。即ち

中道一實ノ花ノ色上求菩提ノ心に染ヌレバ」法性ノ空ラニ宛チ滿チテ寂光ノ宮ヲ可^{ミヤ}レ^{キカサル}飭物ナリケリ」圓融萬德ノ香ノ匂下化衆生ノ思ヒ薰スレハ」無明ノ闇ミヲ訪^{トヲヒ}テ涅槃ノ岸ニ可^{ワタル}レ度者ナリケリ」花ノ匂香ノ煙リ中道一實ノ法ナリケレハ」御誠芳シト照シテ眞如ノ供養ト收給ヘキモノナリケリ」

と。大師御影供においては、「次回向」によつて結ばれている。さて兩者の次第式において、畫讀の前に祭文の項が掲げられているが、兩式ともに略されているのは、『天台霞標』三ノ一によつて補わるべきであらう。即ち「祭智者大師二文」は

維仁壽四年。歲次甲戌十一月朔二十四日。謹以餅菓茶藥。蔬食之饌。敢獻^ニ故大唐法華宗第二祖師。天台大師尊靈。伏惟。大師稟^ニ道於鷲峯。布^ニ影於沙界。備^ニ衆德。以利見。表^ニ奇異。以降生。洞融^ニ三觀。照^ニ萬法於一心。齊駕^ニ白牛。運^ニ蒼生於露地。不^レ出^ニ戶庭。感^ニ見定光於華頂。攀^ニ遊衡岳。發^ニ明三昧於步間。其後

化流我國。風教長敷。朝野歸心。共潤法雨。故唐朝本朝。隔海通音。得前師後師。度代同轍。以曩劫之緣。遠交三寶之列。受玄風。獨思高朗。汲清流。轉覺廣深。投身碎骨。何報厚恩。隨年邀辰。講聽妙典。奉酬無窮之德。謹獻蔬食之饌。伏願大師尊靈。大唐八祖。同垂納饗。(佛全・二七二)がその全文である。

最後に天台大師畫讃の傳承者を『三寶繪詞』は擧げて智證大師圓珍となす。圓珍は仁壽三年(八五三)八月入唐し、その年一二月天台山國清寺に、翌年二月(唐大中八年)禪林寺に入り「拜智者大師留身之墳」している。その他、具さに大師の遺跡を巡拜して、國清寺に還り坐夏し、「就僧物外邊。請本抄寫天台教法。近三百卷」きものを得ている。特に注目すべきは、傳に「又將太政大臣在注。送供智者大師影砂金四十兩。修其墳塔及以國清佛殿。合國讚揚。不可勝記」とゆう事業を完遂していることは、大師畫讃取得に連繫のあることに考えられる。

『三寶繪詞』は次いで智證大師の傳を述べているが、『天台宗延曆寺座寺圓珍傳』に據るものである。該當する部分を抄記すれば、

天台宗延曆寺第五座主人唐傳法阿闍梨少僧都法眼和尚位圓珍。俗姓和氣公。……嘗夢。乘大舸浮巨海。仰見朝日初出。光耀赫奕。將以手捉之。爰日更如飛箭。來入口中。覺後以夢語其夫。答曰。此吉徵也。當生賢子。無幾懷妊。遂誕和尚……。年始八歲。語其父云。內典之中。可有因果經。羨令我誦習。其父驚異。即求而與之。和尚得之大悅。朝夕誦讀。未嘗休廢。鄉閭視之者莫不歎異。……十五隨叔父僧仁德。初登叡山。仁德語云。兒器宇宏遠。誠非凡流。吾是短絛之量。難測其淺深焉。須請業碩學期彼大成。即託前入唐尋教沙門第一座主義眞和尚。和尚嘉其才量。盡意善誘。授之於法華金光明。大毘盧遮那等大乘經。及自宗章疏。……仁壽元年四月十五日。和尚辭京。向太宰府。遂入唐之志也。同三年七月。解纜進發。天安二年歸本朝。乃奉奏狀。叙在唐行事。兼陳意趣本末。

(續群八下、七〇一以下)

霜月會を含む報恩行事の根據として、『梵網經』が引れているが、その全文は若父母兄弟死亡之日。請_レ法師_一講_二菩薩戒經律_一。追福資_二其亡者_一。得_レ見_二諸佛_一生_二人天上_一。若不_レ爾者。犯_二輕垢罪_一。(正藏二四・七八〇頁)の註を取つて示している。

九 おわりに

上來『三寶繪詞』卷下に扱われている、天台宗の年間行われる佛會について述べた。もつともこれですべてを盡したと言うのでなく、さらに三月高雄の法華會の如き、その淵源について同書には

高雄の法華會は。行來れる事久し。寺の檀越大學頭和氣弘世并に眞網等。比叡の傳教大師を請したてまつれる文に云く。千歳のながき例。この度始べしといへり。これより始ておこなへるなり。其後奈良弘法大師。此寺によりてすみたまふ。(中略)その門徒。此寺につたはりますみて。此會をとりおこなふ。第五卷の日は。捧物を高雄の山の花の枝に付て。讚歎をきよたき河の波のこゑに合せり

とあつて、法華經の講讀は推古一四年(六〇六)聖德太子が岡本宮で講ぜられたのを矯矢とし、天平一八年(七四六)三月、良辨が羅索院において請じ、爾後恒例の勅會となる。最澄は延暦一七年(七九八)十一月、山中において十講法會を開き、南都の碩德一〇口を講じ、同二〇年(八〇二)法華十講を修し、南都の十大德は各一卷を講じた。爾後毎年この講を開き十一月法華會、または霜月會と言ひ慣わすに至る。かくて延暦二十一年には高雄山寺において修せられ、その後この寺に住する空海の門徒によつて執行せられたのである。

以上によつて明らかな如く、高雄の法華會は最澄始修の形態を傳えるもので、天台宗の要素が多いが、いまは法會の行われる土地、伽藍によつて區別し、高雄の法華會は採らないところである。

また熊野八講會は、「此山の本神と申新宮本宮に。みな八講をおこなふ」とある。八講と神社の關係についてもこの社いませざりせば。八講をも行はさらまし。此八講なからましかば、三寶をもしらさらまし。五十人までも語傳かたかるへき渺々たる所に。妙法をひろめきかしめ結へるは。菩薩のあとをたれたるといふべし。四日の檀越。執行はたゝきたれる人のすゝむるにしたがふ。八座の講師聽衆は。あつまれる僧のつとむるにまかせたり。僧供は鉢鏡をもまうけす。きのこふにうけ。帶袋にいる。講説は裳袈裟をとゝのへず。鹿皮衣をき。脛巾をしたり。貴賤のしなをもえらはす。老少をもさためす

とあつて、都市と僻地、文化の距離の遠さを如實に物語っている。この八講は異色があつて、中央文化圏の仰山らしい手續きと華ばなしさの中に、身動きもならぬ窮屈さの感ぜられるのと比較して、自由闊達さ、轉變自在、機に臨み變に應ずるおおらかさの中に、庶民に親しみを與える鄙びた行事であることが伺える。これも行われる土地により天台の佛事に入れないところである。

本論文に記述するところは、甚だしく内容に前後があり、繁簡精粗、且つ意を盡さぬ點が認められるが、儀禮のいちちについては、『三寶繪詞』卷下の本文の理解を持つことを主眼としたため、本文に準じて筆を進めることにした缺點によるものである。なお本文に引く經論その他について、原據を追及することのできなかつた點も多い。幸い大方諸賢の御示教御叱正をうることができれば、喜びこれに過ぎるものはない。最後に標題に羊頭を掲げながら内容は淺薄な狗肉であることを慙謝する次第である。

